



和田英子著

(學習文庫第三篇)

富岡後記

信濃教育會編
古今書院發行

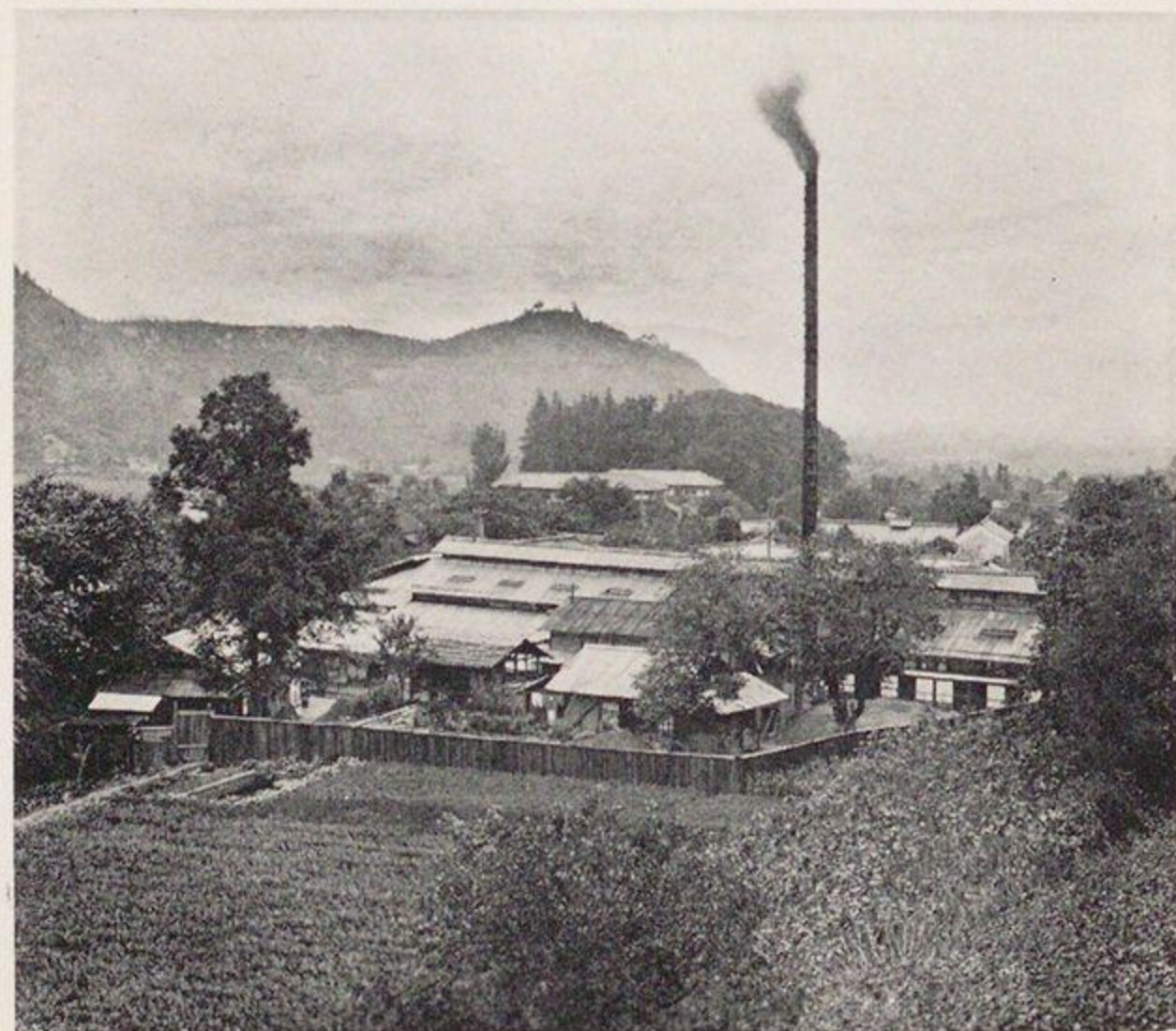
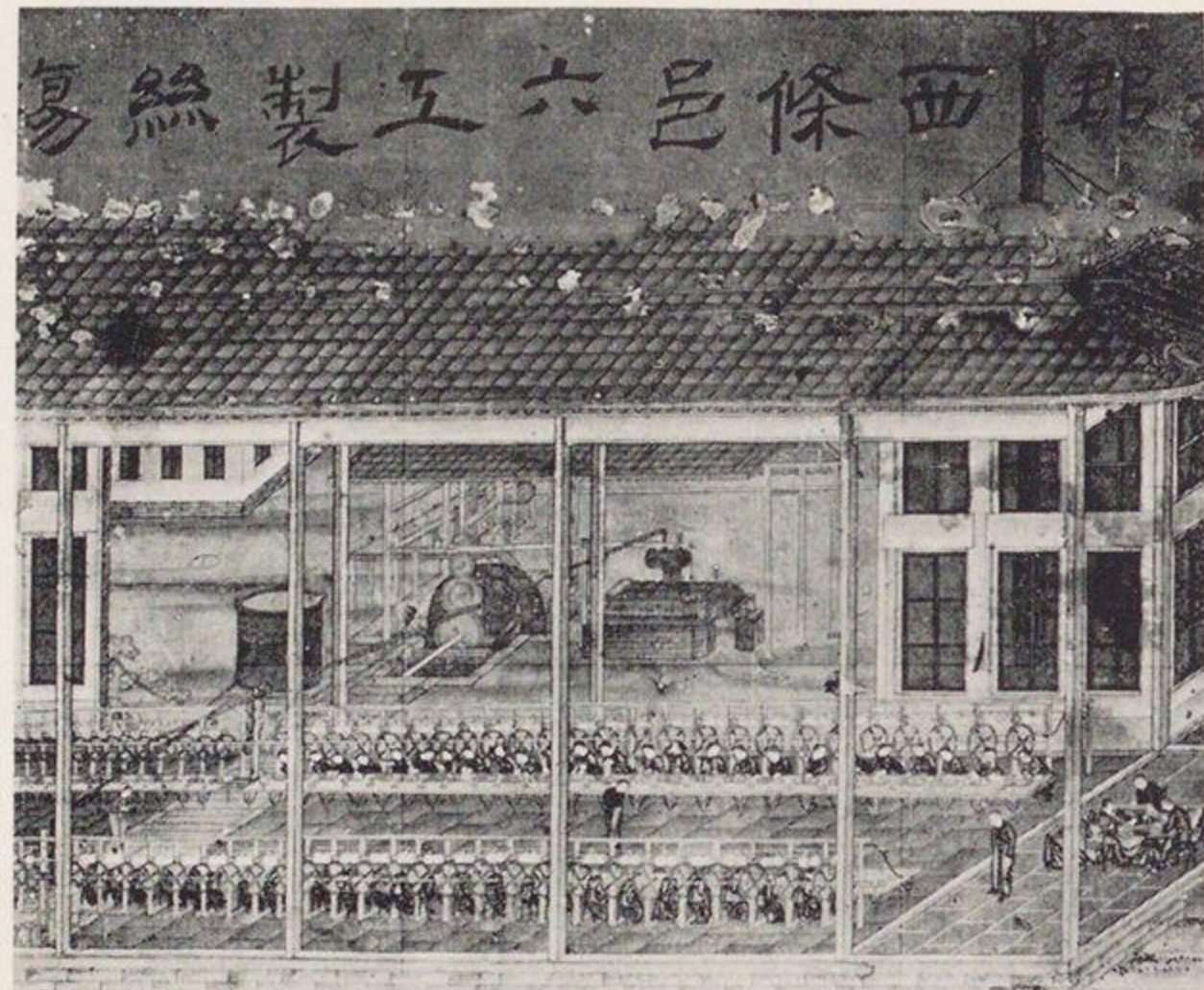
正誤表

富岡日記	一六	二	直鑰	眞鑰
同	七七	七	わぎわざ	わぎわざ
富岡後記	八三	四	上田町	上田町



小元お近江の人等

七月、初め、終、六五社創立、何事も改し、
 板浪身太し、此と氏、社、女、一同、所、眺、り、な、と、
 所、古、山、山、り、て、高、野、所、製、糖、糖、れ、も、頭、な、れ、り、た、
 所、言、殊、し、唯、是、を、所、并、り、し、心、り、て、所、途、所、夢、有、け、り、
 所、言、し、て、り、年、が、一、未、だ、お、り、た、ら、な、ら、ず、と、所、情、不、
 所、立、つ、年、は、な、ら、ず、と、所、情、不、
 所、立、つ、年、は、な、ら、ず、と、所、情、不、



昔今の社工六

目次

次	目	
第 一	六工社初見物	一頁
第 二	六工社初製絲並に私の病氣	二
第 三	六工社開業式と同行者の等級	五
第 四	六工社工女の選み方並に工女取締	九
第 五	私の病氣見舞並に入場	一一
第 六	富岡歸り一同の不平並に母よりの申聞	一五
第 七	六工社創立に付苦心致されし人々	一八
第 八	繭の龜惡と不足	二四
第 九	絲 結 び	三五
第 十	蒸汽元釜の注連繩	六六

第十一 蒸汽の不足、元方一同の困難 三〇

第十二 六工社のはやり歌 三一

第十三 起死回生薬とも言ふべき一つの樂 三三

第十四 部屋長と規則 三九

第十五 白鳥神社祭禮 惣工女の休業、部屋長三人居残り社長春山氏の御招待 四三

第十六 元方一同の苦心 大里夫人の繰糸、富岡歸り一同の決心並に元方への申込 四五

第十七 折紙付の工女 五五

第十八 富國強兵と横田家の悲慘 五七

第十九 大里氏と四百廻 六九

第二十 六工社の夜學 八〇

第二十一 六工社と小野組 八三

第二十二 閉業祝と仕着せ 八四

第二十三 六工社よりの禮、私の心の迷ひ 八七

第二十四 六工社創業第二年目の春 九六

第二十五 六工社製絲の初賣込 生糸只二棚、中村氏賣込場の物語 一〇一

第二十六 賣込相場銀目の事 一〇六

第二十七 賣込後の六工社 一〇七

富岡後記

六工社初見物

私共一同は明治七年七月七日故郷松代へ着致しまして、其の翌日は宅に居りましたが、其の翌日九日埴科郡西條村字六工に建築致されましたる六工社製絲場へ一同打揃うて参りました。其の道にありました大里忠一郎氏の御宅へ立寄りまして、同氏並に夫人里子御老母等に御面會致しまして、同氏の御案内で六工社へ参りました。

機械其の他を見ました。兼て覺悟の事なれば別に驚きも致しませぬ。却て能

く此の位に出来たと思ひました。しかし富岡と違ひます事は天と地程でありま
す。銅・鐵・眞鍮は木となり、ガラスは針金と變り、煉瓦は土間、それはそれは
夢に夢を見るやうに感じましたが、先づ先づ蒸気で絲がとられると申すだけで
も日本人の手で出来たとは感心だ位にて、其の日は引取りました。

六工社初製絲並に私の病氣

翌十日は宅に居りまして、其の翌七月十一日いよいよ初製絲にかかりますの
で、私共仲間六七名参りまして、釜場のありました通りの眞向き南側（大ぜんま
いのありました西二釜目）でとり始めまして、代る代るにとりましたが、何を申す
も天日で干上げた小粒な繭でありますから、繭に重みがなくて、其の絲の口の
細き事、指にべたべた付きまして實にとり惡き事は富岡で一度も手がけた事が
ないやうに覺えました。富岡は蒸汽の通りました大管で蒸してありますから、

どのやうにたたぬ繭でも重みがあります。しかしとる事が出来ますので一同喜
んで居りました。

とり釜は半月形で、中にパイプが出て居ります。形も小さくありますから簞
も十分につかはれませぬ。其の日は代り代りとりまして、翌十二日にも又々参
つてとりましたが、私は晝頃から俄に寒氣が致しまして、段々寒くなりまして、
末には顔色が眞青になりましたと申す事で、皆一同心配致されました。それで
大里夫人も大そうお案事下さいまして、御召縮緬霜ふりのお羽織をお貸し下さ
いまして、宅に歸つて養生を致すやうにと呉々おすすめにありますから、私も
歸宅致します事に決めました。するとおいやを御付け下さいますから再三御辭
退致しましたが、是非々と申されますので、其の人と歸りましたが、途中私
が考へますには、私が六工社から病氣で歸つた事が世間の人に知れると、又何
だのかだのと申して、新入工女の氣受けに障り不都合ならんと思ひましたから、

馬場丁の金井氏方へ寄り休ませて頂き、夜に入つて歸宅致す方が宜しからんと、直に金井氏へ参りまして、右の次第をお話致しまして、お座敷に休ませて頂きましたが、其の時ははや心の緩みと病の重りと同時になりました、身動きも出来ぬやうになりました、身體は火の付いたかと思ひます程熱く、口は渴き、其の後の事は更に覚えはありません。其の日六工社へ参ります時、父の實家の伯父に途中で逢ひましたが、未だ歸國後其の家へ参りませぬので其の事ばかり心にかかりまして、折ふし其の事を申して居りましたとの事であります。

金井氏では夕方になりました、私が右の有様でありますから大そう驚かれました、早速實家へ知らせて下さいまして、母と姉が参ります、醫者が参りまして診察致しまして、是は「傷寒」だと申されましたとの事であります。金井氏方では御家族惣がかりで御看病下さいまして、其の上夫人の姉君迄お出になりました、實に實に十二分の御看病下さいました。お蔭にて四五日立ちますと少

少快方に向ひましたとの事で、夜分駕籠に乘せられて實家へ歸り、養生致しました。其の頃からやうやう正氣になりましたが、未だ一人立つ事も叶はぬ月慥か廿二日かと存じます、六工社はいよいよ開業式が盛大にありました。私は此の盛大なる古今未曾有なる日本帝國民間蒸汽機械の元祖六工社製絲場の開業に出席致す事が出来ぬ事かと病床に泣いて居りました。

私の病氣も幸ひ人に傳染も致しませんで私一人ですみましたのは實に仕合せでありました。只今と違ひ其の頃は豫防と申す事は存じません。皆一緒の所に居りまして其の場で飲食致して居りました。只今思ひますと實に恐ろしい位であります。

六工社開業式と同行者の等級

扱六工社開業式當日、私共一行が富岡退場致します時尾高様より宇敷氏へお

渡しになりました松代工女等級が發表致されたとの事で、同行者の兩三人私の所へ見舞ひ旁知らせに來て下さいました。其の等級左之通り、

二等工女

横田 英 和田 初 小林 高 酒井 民

三等工女

福井 龜 春日 蝶 其の他

殊に驚きましたのは、富岡で大かた三等で居りました人が四等になつて、私などが二等殊に筆頭でありましたから、嬉しいやうな又氣の毒のやうな氣が致しました。

其の人々から承りますと、下つた人は皆泣いて居られたと申す事でありました。私は病氣の爲め開業式に出席出來ぬとて泣いて居りましたが、其の時初めて何が幸ひになるか分らぬと思ひました。私も出席致して居りましたらさぞさ

ぞ下つた人達が氣の毒であつただらうと存じます。殊に私が筆頭に居ますから慰める言葉がありません。又下つた人達も私を憎らしく思はれるだらうと存じます。先づ先づ病氣が却て仕合せであつたと心中喜びました。

私が思ひますには、四等に下つた人などは決して業で下つた譯ではありませぬ。たとひ怠けたと申す譯でなくても病氣其の他で休業の多くあつた人のやうに思はれます。私などの筆頭に居りますのもこれと同じ事で、人様より業が上達致して居つたと申す譯ではありませんが、一心不亂に勉強致して居ただけは決して人様より後には居らなかつたと自分で信じて居りました。しかし一番になつて居らうなどと申す自信もありませんでした。元より同行者は皆座繰は馴れて居る人ばかりでありました。私は宅で蠶を少しづつ飼ひましても、人に絲にしてもらひました。私は生れつき絲など繰ります事が好きでありましたから、毎年くづ繭位手どりに致して居りましたが、たとひ座繰と蒸汽機械と繰り

方は違ひます共、馴れた人と馴れぬ人では一つにはなりませぬ。殊に私は根が無器用でありますから、入場後も其の苦心は一通りではありませぬ。出立前祖父に申付けられました、人後にならぬやう、又父に申付けられました、諸事心を用ひて覚えるやう、殊に一人でも參ると申した自分の口上、此のやうな事を思ひますと、萬一餘り下に居りましたなら兩親に合す顔もありません。又私が下に居りましたら、父が人様に面目を失ふ事であらうと、入場以來實に心の安まる事はありません。とても自分一人の力では及ばぬ事と思ひまして、毎朝神佛に祈りまして、命も捧げる位の意氣組で居りました。其の様子がさすが數多の人の上に立つてお出になります所の尾高様の事、又書生中廻りの人達迄見とお出になりました、只々私の心を筆頭に遊ばして下すつたのだらうと存じます。しかし絲目と櫛數では決して人様の後には居ませぬ。絲は如何か存じませんが、一度も小言を申された事ありませんから、先づ悪い絲はとらなかつたの

だらうと存じます。何事も一心は岩をも徹すと申しますが、實に其の通りであります。

其の後海沼氏が參られました、實はお渡しになります時は、「此の等付は開業式迄決して開く事はならぬ。其の前に開くと女子の事だからどのやうな騒ぎをするか知れぬ、富岡へ歸るの引くのと申すと面倒だから」と仰せられたから、當日迄其の儘にして置いたと申されましたが、尾高様と申す方はどこ迄お届けになつた方やらと實に感佩致しました。

六工社工女の選み方並に工女取締

六工社もいよいよ開業になりました。新入工女は皆身元正しきれつきとした良家の娘さんばかりであります。殊に明治七年未だ世の中が開けませぬ時でありますから、製絲場に寄宿致させますには餘程大丈夫と父兄が思はれません

では出し手はあるまいと言ふ、大里氏初め元方一同のお考から、元松代公の御刀番をお勤めになりました樋口旗之助様と申す方を工女部屋取締にお頼みになりますと、同氏も快く御承知になりました、同氏の息女元子、睦子、上原しと子さんなどを初めと致しまして士族の娘さんが多くありました。たとひ平民の人でも前申しました通り一人としてあやしい人はありませぬ。

何故此のやうにお選みになりますかと申しますと、兎角婦人の多く寄合ひます所は不行状と不品行で世間から彼是申されます。創業の際一步踏み誤ります時はもはや後で取返しが付きませぬ。製絲場へ出た人だからと申して良家の妻女になられぬやうな事がありましたは、第一國の爲に立ちましたる所の製絲場も却て不爲になるやうな事になると言ふ所にお氣の付かれましたからであります。それで樋口様は御年六十歳位の方で至つてお心だてのやさしい、折目正しい、實に取締としては得難きお人柄の方でありました。

此のやうに注意を拂はれました事でありますから、工女方のお宅でも決して心配する人はありません。皆寄宿致されました。同村の近き所の人を通はれました。

扱物には一利一害と申しますが、實に其の通りであります。家が貧しくて出て居る人は使ひ安う御座いますが、何不足ない家の人が只國の爲と申す所から富岡へ行かなかつたから、せめては六工社へでも出て國益になる絲をとらうといふのでありますから、中々新入工女方でも氣位が高う御座います。一寸とした事にも色々苦情が出ますとの事でありました。

私の病氣見舞並に入場

扱私の病氣も中々はかどりません。毎日床の中に心配をして休んで、母の介抱を受けて居ります。日々六工社からは大里氏初め中村氏宇敷氏海沼氏が代り

代りに見舞にお出下さいます。其の内に四十日近くなりましてやうやう家の内から庭前迄歩くやうになりますと、六工社からは早く出て呉れ、一日も早く、とても苦情が出てやりきれぬと申されます。

其の内に、六工社へ来て休んで居ても宜しいから是非々々参るやうにと申されます。私もつくづく考へまして、私が参つたとて何程のお役にも立つまいけれど、あれ迄申されますのに参らぬも悪いやうだと存じまして、まだ實に疲れて居りましたが、勇氣を出して髪を結び、發病以來四十二日目、八月廿二日午前八時過家を立出で、よろめく足を踏みしめ踏みしめ人通りの無い所の石に腰を掛けては休み、又歩みては休み、やうやう六工社迄参りました。元方の方々は申す迄もなく、皆様も待つて居たと申されました、喜んで下さいました。

私が参ります迄は和田さんが絲結びをしてお出になりましたが、私もまさか其の場に参りまして休んで居る譯にも参りません。又一つには氣の立つと申す

は不思議なもので、入場致しますと俄に元氣が生まれて、其の日から絲結び絲揚場四百廻等受持つ事になりました。何が十八歳位な私が参りましたとて何程の事がある譯はありませんが、互に感情を害しました時變つた人が参りますと、其の人に對し折合が付きますと同じ事で、先づ双方から色々のお話があります。私はどのやうな人にも腹藏なく自分の思ひ通りを申します。それで人に憎まれても決してかまはぬと覺悟して居ます。いよいよ中に立ちますと、双方無理のない事ばかりであります。私共の仲間は、繭が悪い、機械の工合が悪い、蒸汽が立たぬと小言を申します。又元方の方は、皆が我儘を言ふと申されます。私は大里氏初めに「皆あのやうに申されますのは實に尤も至極で、あなた方は御存じないから我儘のやうにお思ひになりますやうが、あちらでは實に良い繭をとつて居りましたから」と申して置きまして、又仲間には「あなた方が其のやうにおつしやるのも無理はないが、何を申すも天朝で遊ばす事と下々でする事

だから一つにはならぬ。悪い繭で良い絲をとるのが私たちの腕前ではありませんか。先づ貧乏世帯を持つたと思つて諦めるより外ありませんねい」と申しますと、「お英さんちや、絲をおとりなさらぬからそんな事を言つてお出なさるのだ」などと申されますから、私は「絲をとつて居る方がどんなに樂だか知れやしない。自分一人一生懸命にとつてさへ居ればそれで済むけれど、朝から晩迄立通しで、おまけに絲揚げの手傳までして、彼方からも此方からも色々の事を聞いて、こんな辛い事はありません」と申しますと、それで皆何も申されません。

新入工女の人々は、誰が何と言つたとか、やれ見下げた事を申したとか、直にここには居られぬ、引いてしまふと申されます。其の時は私が「皆様も折角國の爲と思召して御入場になりました、其の位な事でお引きになりましたは、第一世間の人が見た事かと申します。御兩親迄人にお笑はれになりませう。

誰が何と申しましたも皆人が存じて居りますから」と申してはなだめて居ます。しかしここが六工社で見立通り名譽を重んずる人々でありますから、右様申しますと、それでも引くとは申されませぬ。

先づ其のやうな事で何時も納まりますが、中々面倒は絶えませぬ。實際私は双方の間に入りました、双方から色々申されますのを、双方へ自分の考通りを申してなだめて居ますので、絲扱ひは付たり、仲裁役になつて居るも同じ事、何れを見ても心痛は絶えませぬ。元方の方々の日々不安と心痛に充されたるお顔、扱は工女方の不平の聲、何時安心の地位に立たれる事であらうと日夜苦心で明しました。

富岡歸り一同の不平並に母よりの申聞

私の宅は代官丁の下でありますから、仲間の人々が六工社への往き復りに代

る代る寄られまして、柄杓が木だの、匙が灰ふるひだの、手水が瓶だのと小言を申されますと、母が「人の家でさへ其の家其の家で臺所の都合も違ふ、ましてお上で遊ばす事と下々で致す事だから、丁度御殿と我々の家程違つて居るも同じ事、何も辛抱だから小さな家の世帯を持つたと思つて諦めてお出」といふもいつも申して居りました。こんな事で慰められて、皆思ひ直して歸場致されました。只今に其の事を折々申出しては母と笑ひます。

又私も其の頃、皆様には前に申しましたやうに申して居りますが、内々母に此のやうに申しました。「おつかさん。皆あのやうにおつしやるのも尤もでありませう。私だつて皆様のお申し通り、蒸気はたたず、機械の工合は悪く、泣出したいやうだけれど、私から先に立つて其のやうな事を申せば、それこそ皆さんがどんなに申されるか分らぬから、口には立派に申して居りますが、心の内では何時も泣いて居ります」と申しましたら、母が「お前迄が大里さんや海沼の苦

心した事を知らぬから其のやうな我儘を申すが、あれ迄になる迄の御困難はまあどの位だと思ふ。海沼などは夜もろくろく眠られぬと申して居た。繭を二つに切つて釜の代りにし、針金を曲げて蒸気の通る管のやうにしたり、大里さんと二人で實に何共申されぬ苦心をして、やうやう蒸気も通るやう管も拵へ、機械も曲りなりにもとられるやうになつたのは、實に御兩人の御苦心からだ。有難いと思はねばならぬ。お前達が何程勉強して覺えた所で、もし六工社が立たねば實の持腐れ、どのやうに工合が悪く共、あればこそ其のやうな事を申せ、無かつたらどうする。實はお据膳をしてお箸をとつて食べるばかりにして下さつた其の恩も忘れて、うまいもまづいも申された義理ではない。ちと御兩人の御苦心なされた事を思つて見ろ。お前達が何程苦勞だと申した所が知れたものだ。元より樂をしようとして始めた事では無い。國益を計るなどは決して樂で出来るものではない。此の後とてもお前から初めて其のやうな量見違ひな考を持

つてはならぬ」と申聞けられました時は、私も實に濟まぬ事を申したと後悔致しまして、其の後は此の大恩人の苦心致された事を無に致しましてはすまぬと思ひまして、一身を捧げて製絲場の隆盛になりますやう心がけて居りました。

六工社創立に付苦心致されし人々

扱六工社創立に付蒸汽機械發明に付苦心致されました人は、大里忠一郎氏を第一と申さねばなりません。しかし此の蒸汽機械の發明に多く力を盡しましたる人、只今は世人から忘られて居ります海沼房太郎と申す人が第二、以上五分位に記さねばなりません。

大里氏の事は世人も能く存じて居られますから、私が別段記すには及ばぬやうに存じます。海沼氏は富岡の巻に記して置きましたる如く、私の父が奨めにより富岡御製絲場へ三四ヶ月間同志四名と共に工男として入場して居りました

が、歸國後蒸汽機械發明に苦心致して居りましたが、中々創立致す程の元金がありません。貧しいと申す譯でもありませんが富んで居ると申す程でもなく、先づ通例の生計を立てて居つたのでありますから、種々苦心致して居りますと、幸ひ大里氏が國益を計る爲め製絲場を立てたいと申して居られますので、兩氏が一致して創立する事になりました。

大里氏は以前汽船に居られました所から、力を多く蒸汽元釜から大管を通して小管(パイプ)に渡ります方を受持つて居られましたやうに承ります。海沼氏は小管(パイプ)即ち煮釜線釜に蒸汽の通ひます所のネヂの付け方、又機械全部皆指圖されたのであります。

只今に思ひますと不思議な位でありますのは、交通不便とは申し乍ら日本帝國民間蒸汽機械製絲場の元祖六工社の創立に、元方の方が富岡御製絲場へ一人も拜觀に參られませんか。私共の迎ひに宇敷氏が初めてお出になりました。其の

時にはもはや機械其の他出來上つて居りました。私の父がフリユナ氏條約書明細書を寫して參りました、其の書物を元として、其の他は海沼氏に一任して、同氏の考通りに立てたのであります。如何に信用して居られたかは此の一事でも分ります。海沼氏とても學校に出た人でもありません。圖を引く事も十分には出來なかつたらうと思ひますのに、先づあれだけに仕上げました、其の苦心は如何ばかりだらうと存じます。僅か三四ヶ月の間、殊に掛りが違ひますから、休日の外練場に入る事は叶ひませぬ。父が尾高様へ願ひ置きまして、休日毎に練場の内を拜見致したとの事であります。只今の世なら有名な技師にでも圖を引いて貰ひますれば譯はありませんが、中々の事では無かつたらうと察します。

同氏の身元は松代町字清須町のはづれ堀切と申す所の農家の長男でありますから、幼年の頃市中を野菜など賣つて歩きましたとの事ではありますが、兎角農業を嫌ひまして、其の頃の事でありますから兩刀をさします事を好みました、

其のやうな譯に參りませぬから、廣小路眞田（私の姉の家）の家來分になりまして、慥か二人扶持貰ひまして、一日置き、毎日のやうに同家へ出勤して居りましたから、自然私の家へも使ひなどに參りまして、私共へも出入致すやうになりました。同氏の先祖は琉球から難船致して來た者だと申して、系圖なども立派になつて居ると常々申して居りましたが、口では何とでも申されますが行ひに於て其のやうではないかと思ひます事が澤山あります。同人の父は活花と尺八の名人でありまして、裏町の長谷川三郎兵衛と申された活花と尺八の名人の方の後を嗣いで居ましたから、海沼氏も活花は皆傳と迄は至らぬやうでありましたが、實に美事に活けました。又尺八も上手に吹きます。發句も致しますので、私の家に參りましては始終活花を致して呉れます。尺八も「鶴のすごもり」など吹いて聞かせました。私の祖父は至つて鳴物が好きで、又發句・歌なども少しは致しましたから、母なども至つて好みます所から、折々參りましては色

色話します。眞田は叔父初め武人氣質で一向其の様な事を好みませぬから、兎角私の宅の方へ出入致し勝ちに末にはなりました。其のやうな關係から父が勧めましたのだらうと存じます。

第三に苦心致されましたは横田文太郎と申す人と金兒某、是は元松代藩御鐵砲鍛冶を勤めた人で、横田氏は慥か宇離山に住居致されたやうに存じます。此の人が見た事も圖も十分に無い蒸汽の管(パイプ)をネヂで止めたり返したりする事を誂へられ、拵へても拵へても、是ではいけぬ彼れでは違ふと海沼氏が申しますので、折々立腹致された事もありましたとの事ではありますが、何も國の爲と申す所から、打返し打直し致されました、先づ先づ蒸汽の漏れぬやうに致されましたとの事でもあります。一寸した事のやうであります、圖もなく形もなく只手眞似と口ばかりでする事を仕上げます其の苦心は、どの位でありましたらう。

第四は湯本宇吉と申す人でもあります。此の人は元松代藩の御鎗の柄をこきます御鎗師を勤めた人でもあります。實に指物は名人であります。此の人が大車・小車・ゼンマイ等全部致したのであります。是も前同様圖も無く一度も見たり事も無き機械を仕上げます事でもありますから、如何に苦心致しましたであらませう。

第五が與作と申す大工の棟梁で、是は別に苦心致したと申す程でもありませんが、何分是迄立てた事も無い形の建築でありますから、當人の身に取りましては如何に苦心致した事であらませう。

以上記しましたる所の人々に手眞似口ばかりで申聞かせます海沼氏の苦心も實に察したものであります。それを近くに居りまして見聞き致しましたる所の母の目から見ました事でもありますから、私を我儘と申して申聞かせましたは實に尤も至極、母が申さねば私も若年の事でもありますから、知らず識らずに手前

勝手な理窟を付けて我儘を考へましたかも知れませぬと、實に心中恥かしく思ひました。右の次第でありますから、海沼氏の祖先が立派なる所の人だと申しますのに符合致して居りますやうに思はれます。只の農家の人に其の頃其のやうな思ひ立ちを致す人は日本國中に先づ皆無と申しても宜しき位でありました。何分三十六年の昔は只今と世の中が違ひましたから。

繭の粗悪と不足

繭の仕入れが出来ませんから、元方のお宅でお飼ひになりました蠶の繭の外、賃絲を繰りますのであります。其のやうな時は少々良き繭もありますが、六工社の絲を繰ります時には市中で座繰にかけました後の選り出し、其の頃の縮緬絲に繰ります繭を買つて来て繰りますのであります。是が能くとられたものだと思ひます位であります。私は新入工女を折々教へる時とります位で、多くと

りませんが、實に見て居る方が辛い事で、折々大里さんに「此のやうに休んで居りましたは手も下りますから、和田さんに代つて頂いて絲をとらせて下さい」と申しますと、「あなたが其のやうな事を言つて下さつては困ります。和田さんには絲の方を願ひ、あなたには此の方を願はねばなりません」と、幾度お願ひ申しましてもお聞入れになりません。私も此のやうに心配な事はないと思ひますが、仕方がありませんから其の儘に打過ぎて居りました。

此の繭買入れ並に集め方は多く中村氏土屋氏が受持つて居られました。岸田氏も折々其の方をして居られたやうであります。其の苦心は中々筆にも盡されぬやうに見受けられました。

絲 結 び

開業以來絲結びの振り方は中村氏の母御でありました。年は五十歳以上の人

でありましたが、實に女子の鑑と申して宜しい位の人でありました。行儀作法の正しい、言葉遣ひのやさしく丁寧なる、若き時は如何ならんと思はれます程美しく、いつも笑顔がはなれません。にこにことして、決して人の悪口など申された事はありません。それで少しも油断なく業をして居られます。日々一緒に居ますが、一度も缺點を見た事がありません。元より此の方は缺點と申す事が無いのであります。私などは自分の事が折節恥かしく思はれました。しかし其の筈であります。此の方は二十三歳で後家になられまして、手一つで金作氏を養育致されまして、婦道を能く守り候とて松代藩から度々御賞を受けられた人だと申す事であります。私の母が、其の人と日々一緒に居るは喜ばしい事だと常々申して居りました。

此の絲結びでも實に私は困難致しました。富岡の巻で申しました通り、教へて下さる方が「あなたでもお國へお歸りになれば先生だ」と申されたやうな私

が先立つて結びます事でありますから、美事に結べる譯はありませんが、せめて大枠に綾でも十分かかつて居れば、習ふより馴れろと申す諺の如く、一心不乱に致して居りますから段々上手にもなりますが、何を申すも綾が少しもかかつて居りませぬ。あやふりはありますが、大枠何廻に何度と申すきまりなしに動いて居るばかりでありますから、絲をはやしますと皆眞直になつて仕舞ひます。丁度座繰の大枠のと少しも違ひませぬ。中村氏の御老母とてもはや御老年の事でありますからお手に脂がありません。花の先が皆つぶれて仕舞ひます。又若き人に申すやうに喧しくも申されませぬ。實に仕上げが悪しくなりますのにほとほと降參致しました。此の御老母がお宅に御用でもあつて御不在の時は、大里様初め中村宇敷等の兩名代り代りに振り方を遊ばしました。

又絲に等付けを致さねばなりません。届かぬながら私が等を付けまして、札を隠して置きまして、大里様中村様が又お付けになります。先づ此のやうにし

て段々お馴れになりましたが、只今に恐入つて居ります事は、若年の私の申す事を決してお疑ひになりませぬ。何でも私が是は一等で宜しいと申せば其の通り、二等と申せば其の通り信じてお出になりますから、私も一生懸命違はぬやう用心致して居りました。絲揚場で名札の字が見えぬやうに付けます。それは私とても心の迷ひが出てはならぬと存じます。此の絲ばかりはどのやうな上手な人でも時により三等四等の絲をとらぬとも限りません。名を見ますと、彼の人がこのやうな絲をとる筈がないと見直して等を上げるやうな事があつては濟みませぬ。又習ひ早々の人でも時により良品を繰らぬとも限りませぬ。名を見ぬが一番大丈夫であります。

蒸汽元釜の注連繩

其の頃火燃きをして居られました人は、艸川某並に藤田五三郎といふ人であ

りました。此の兩氏は至つて善良な人で、艸川氏は六工社近くの艸川某の弟君でありました。藤田といふ人は松代公の御近習を勤められた爲太郎といふ方の弟君であります。兩氏共身元正しき良家に成長致されましたから、品行方正勤務勉強でありました。

しかし兩氏共年若の事でありますから、工女が釜場へ入るやうな事がありましては、末に間違ひが出来てはならぬと申す元方御一同のお考から、釜場の四方へ注連繩をお張りになりました、婦人が立入つては釜場が汚れると一同へ申渡しまして、圍内へ一步も入る事はならぬと禁じてありました。十一か二三歳の絲揚げの少工女だけ折々火を取りに参りましたが、其の他の工女は決して入れません。此のやうな事に迄注意致されましたは實に感佩の外はありません。たとひ品行はありませんでも双方若き者の事でありますから、話に身が入りどのやうな過ちが出来、人命に迄かかはらぬとも限りませぬ。既に石川縣金澤

市小立野と申す所の小鋸屋と申す製絲場では、午前六時頃工女の大勢が釜場に入り、火燃きと雑談致し、火燃き工男が話に身が入り、蒸汽元釜が破裂して、工女七名工男兩名即死致し、其の他負傷者の多くがありました。實に恐る可きは釜場へ工女の入る事であります。

蒸汽の不足 元方一同の困難

蒸汽がとり釜に合せて小さう御座いますから中々行渡りませぬ。一口とつては手を休め、二口とつては休むと申す有様、松薪を燃きますと能く立ちますが、さうさう松薪も續きませぬ。其の上九日間とりますと油煙が溜りますので、猶立ちませぬ。繰場から工女が待遠になりますと、「艸川さん、松薪を燃いて頂戴」とか「藤田さん、氣付いて燃いて頂戴」とか騒ぎます。私は實に苦々しく聞兼ねますが、實に無理も無いと思ひますので、此の事ばかりは知らぬ風を致して居りました。

其のやうな有様でありますから、休の前日とり終ひますと、直に釜掃除があります。只今と違ひ元釜が半月形で、半分は土で塗上げてありますので、其の土を崩して塗替へるのであります。此の塗替への時は、大里氏初め中村宇敷土屋の方々も皆はだしになつて、土をこねるやら畚を運ぶやら手も足も泥だらけになつて働いてお出になります。是を見ますと、實に實にお氣の毒でたまりません。皆是迄土いちりなどなすつた事のない方々ばかりであります。此の一事でも創業當時の方々の困難なされました事は分ります。第一元釜が何馬力と申す事も其の頃分らぬのであります。如何に如何に苦心をされたであらませう。

六工社のはやり歌

私共仲間が道を通りますと、人々が口をききます。肥つて居ますので「ぶた、

ぶた」と申したり、又「やめてお呉れよ西條のきかい、末は雲助丸はだか」。大聲でうたひ續けます。豚と申されますのは別に心にもかかりません、腹も立ちませんが、歌を聞きますと、身の毛も彌立つやうに感じます。もし此の歌のやうになつたら其の時は世間の人は何と申すであらう、私共はどうしたらよからうと、實に心配で心配で夜の寢覺めにも其の事が心にかかります。もし其のやうな事がありますれば、私などは地下に入りましても目を眠る事は出来ぬであらうと思ひまして、何事も神佛の御力を願ふより外はないと存じまして、毎朝祈念をして居りました。

起死回生薬とも言ふべき二つの樂

以上認めましたる如き苦痛に日を送ります所の私が、如何にして病氣にもならず勤めて居られるであらうと、人様は不思議にお思ひになりませうが、此の

苦痛に打勝つて勤めて居られます二つの原因があります。一は場内、一は自宅にあるのであります。

先づ場内から申しますと、外ではありませぬ、絲揚場にありました。絲揚工女も富岡の如く十一二十三歳止り位の少工女でありました。此の少工女達もやはり良家に育ちました人ばかりでありますから、至つて人ずれて居りませぬ、皆無邪氣なおとなしい、實に可愛らしい人ばかりであります。靜なる土地、おだやかなる家庭、慈愛深き兩親の手に成長致されましたる此の少工女が、私が絲揚場へ參りますと、皆一同かけ出して參りまして、「横田さんお早う、横田さんお早う」と花の如き愛らしき笑顔を以て申されます。其の顔を一目見ますと、如何なる苦心も一時に忘れまますやうに覺えます。殊に此の少工女達は一心不亂に業を致して、決して私が申す事を背きませぬ。皆睦しく、絲の切れぬ時は互に無邪氣に語り合つたり、又私の傍に寄つて參ります。私も繰場へ參りますが

多く絲揚場に居りまして、四百廻をとりましたり、糸結びの間には此の少女達につなぎ方、切方、口の止め方等教へ、又手傳ひましたり致します。何を申しましても皆幼年の事でありますから、斷えず注意してやらねばなりません。まれに仲間と言合ひ等致しまして目に涙をためて居りまして、私が双方へ申聞かせますと、直に仲も直りまして、常の如く精を出して居ります。私も苦心致して居ります事など決して人に知らさぬやう平氣を装つて居りますが、餘り心配の時は、思ひ内に有つて色外にあらはると申す諺の如く顔にあらはれますと見えまして、少工女達が「横田さんおかげんがお悪う御座いますか」と氣遣はしうに皆私の顔をのぞき込んで申されます。私も驚きまして「いゝえ、何共無いです。どんな顔になつて居ます」と笑顔を致しますと、「そんならよう御座いますか」と皆安心したやうにとども笑顔を致されます。其の愛らしさは只今も目の前に見ゆるやうに覺えます。それで此の小さきお友達に心配をかけては

濟まぬと存じまして、いつも悟られぬ用心を致して居りました。來る日も來る日も此の愛らしきお友達に慰められて、心も晴れ晴れと致します。

いま一つは私の宅にあります。明日は休と申す前日、業も終り後始末も十分に済ましますと、私ははや足も地に付かぬ位になりますので、製絲場の食事が出て居りますが先づ食した事が無いと申しても宜しう御座います。歸心矢の如くとか申す諺は此のやうな時の事だらうと存じます。私の目には宅の有様がありありと見ゆるやうに思はれます。母の笑顔、弟等の待つて居りましたと言はぬばかりの顔、さては妹等の喜びます顔。それで私も着汚しの衣類等を一包にして引かかへ、飛鳥の如くかけ出します。幸ひ歸りは下り坂でありますから思ふままに急がれます。はや家近くなりますと、妹兩人が道迄迎ひに出て居りまして、左右より袖や袂につかまり、「お歸り、お歸り」と喜びまして、門に入るとや早々玄關迄かけ付け、大聲に「おつかさん。富岡の姉さんがお歸りになりま

した」と大喜びで申します。中に入りますと、母が末の弟の看病に青白くやつれた顔に笑をたたへまして、私に心配を致させまいと思ひましてか、疲れたる様も見せず、元氣よく「お、歸つたか。お前の好きな物を拵へて置いたよ」と申します。母は製絲場の事に付きましては私以上心配致して居りますから、私も決して自分の苦心致して居る事を申しませぬが、子を見る事親に如かずと申す諺の如く、私の苦心致して居る事を見抜いて居りますから、さてこそ九日間の苦勞を慰めてやらうと思ひまして、私の好みます所のおひつかき其の他を拵へて待つて居ります。母の熱き慈愛に仕上げられましたる御馳走は山海の珍味を聯ねたる百味の御食にもまさる賜物と心に感謝致しまして、身の幸福を喜びますと共に、世に慈母無き人は此の温き恵みの有難さを知らぬであらうと、人の身の上迄氣の毒に思ひながら食して居ります。

も一つには弟共や妹共が、私の留守中の學校の成績より、魚取りとんぼ釣り

の手柄話迄、銘々の口から語られます、其の嬉しさ楽しさは中々筆にも盡されませぬ。やがて食事も済みますれば、母より留守中の出來事又は親類其の他の事迄落なく話されます。私も種々物語り致します内には夜も更けますから、床に入りまして母は色々話して呉れますのを承りながら、安心と日頃の疲れに知らず識らず眠つて仕舞ひます。朝になりまして、夕べも又枕に付くと直に返事が無くなつた、お前程早く眠る人はめつたにないと笑はれます。

朝は早く起き出まして、家の掃除、衣服の始末、留守中皆が着汚しました衣類の洗濯にかかります。何故此のやうに致しますかと申しますに、末の弟が植痘瘡がこじれまして患つて居ます。夜分は少しも下に休みませぬ。母は夜通し抱いて立通して居りますから、私が代つてやりたいと思ひましても、留守中生れましたから馴染ませぬから、私の手に參りませぬ。女中が一人居りましたが、日の内守りを致したり御飯拵へを致しますのがやうやうでありますから、

何もかも其の儘に致してあります。それ故十日目十日目の休日に私が致すのであります。しかし同じ業を休みなしに致しましたら倦きる事もありませうが、全く違つた事を致しますので中々面白いと思つて居りました。終日家の品自分の品双方洗濯致します間に、母は元氣能く話しつづけて呉れます。故叔父さんが何と仰せられたとか、お祖父さんが何とお申しになつたとか、又は製絲場がやがて盛んに成つたら土地が繁昌するだらうとか、すべて私の氣の引立ちますやうな勇しい事のみ申しまして、決して氣の沈みますやうな事は申しませぬ。それで私も命と共に衣類の洗濯を済しますと、早夕食を致します内に皆ぞろぞろと誘ひに參られますから、九日間入用の品を一包にして、氣も晴れ晴れと勢よく出かけて參ります。

此のやうな樂園が私にはありますので、同じ事を繰返し繰返し苦心は致しましても、病も出ず勤められたのであります。後で考へますと、私一人で決して働いたのではありませぬ。此の二つが働かせて呉れたのであります。

私は休日から休日迄歸宅は致しませぬ。私が先立つて歸りましたら、皆宅は戀しう御座いますから納まりが付きませぬ。自分も歸らず他の人の歸りたいと申します事をも止めました。

部屋長と規則

私が入場致します前に部屋長惣部屋長が出來て居りました。部屋は南部屋二間北部屋二間ありました。南部屋の惣部屋長が和田初子、他は福井龜子。北は惣部屋長が私で、他は酒井民子。酒井さん福井さんは平の部屋長で有りましたから、實にお氣の毒に存じましたが致し方がありません。工女の病氣引事故引共部屋長より惣部屋長へ申出で、惣部屋長より取締樋口様へ申出で、同氏より帳場へ申出で、其の上にて許可致す事になつて居ります。休日の外の歸宅は其

の通りであります。決して本人より直に帳場又は取締へ申出す事を禁じてあります。中々手續が面倒であります。此のやうにして置きませぬと皆歸宅ばかり致すやうになりますから、わざと其のやうにしてあります。

私の部屋には澤山仲間の人が居られました。小林高・米山島・東井とめ・長谷川濱・春日蝶・金井新・宮坂品、新入では樋口元・上原しと・井上みつ等の方々で、他にも幾人か居られました。隣室が酒井さんであります。ここにも澤山居られました。

扱部屋には夜分より外居りませんが、誠に世話がありません。皆お宅でお行儀正しくお育ちの人々でありますから、寝ころんだり足を出したりする人はありません。いよいよ休みます時か入湯致します時の外細帯一つで居る人もありません。休みます時も銘々「お休み、お先に失禮」と正しく挨拶せぬ内に床に入るやうな人もありません。私は長起きが癖でありますから、毎夜々々仕事を

致しますので、仕事を好む人はやはり夜なべを致します。朝も互に正しく挨拶を致します。朝は夜具丈銘々に片付けまして、掃除番兩人づつ順番に致しますから、當番兩人だけ残りまして掃除を致させます。私も皆様と同様致しました。皆やめて呉れと申されますが、自分が先立つて致しませんと、兎角やりばなしになりますから、始終致して居りました。中々きれいに致して置きました。大勢居りますから餘程きつく致させぬと、末には豚小屋のやうになるであらうと思ひましたから、どの部屋も同じ事でありました。しかし仲間の人達が決して私の申す事を背くやうな事を致されませんには感心して居りました。是も偏へに元方の方々が和田さんと私に権力をお持ちせ下さいました賜物と存じます。私共とても決して仲間の人を見下げるやうな事は致しません。皆様の御心中を察しますとお氣の毒でたまりませんから、先づ一度も勤め兼るやうな事ありませんのは、一つは大里様の御引立と仲間の方々のおとなしいお蔭と只今に感

謝致して居ります。

白鳥神社祭禮 惣工女の休業

——部屋長三人居残り社長春山氏の御招待——

扱追々日も立ちまして、白鳥神社の祭禮の前日になりますと、誰が申出しましたか、皆休みたい休みたいと申します。和田さん酒井さん私の三人が色々申しますが、中々聞きません。私が「村の方は村のお祭だからお休みになりますのも御尤もであります、町には何もありませんから其のやうな事を言はないでお置きなさい」と申しまして、是非休みたいと申されます。私共仲間の人も先立つて申しますから、私共三人帳場へ参りまして「とても此の様子では、無理にとらせても碌な糸も出来ずまいから、休にして頂きたい」と申しましたので、惣休業になりました。

私は心中をかしくてたまりません。皆やられた所で別に面白い事も御馳走もないのに、後で悔むものだと思ひましたが、口外は致しませぬ。すると其の時何處でしたか覚えはありませんが、博覽會に糸を出品致すのでありました。大里様が「あなた方お三人明日お残りになりました、出品の糸をおとり下さるやうに」と申されましたから、私共三人「お安い御用です」と申しまして、翌日三人で終日其の糸を繰りまして、夕方終わりました。すると社長春山喜平治様からお使が参りまして「お三人様に、風呂も立つて居りますからお夕飯を召上らずにお出下さるやう」と申す事でありました。廣い部屋に三人居り、寂しく思つて居りました折からでもありましたので、三人打揃うて伺ひました。代り代りお風呂を頂き、村の祭禮の事とて種々御馳走になりました。御飯後製絲場のお話が出ました。春山様が「あなた方富岡の何もかも揃つた所からあのやうな所へお出になりました、さぞ御苦勞だらうと實にお察し申して居りますが、何

分元金が不足だから何と思つても致し方がない。實にお氣の毒だが御辛抱を願ひたい。其の代り利益がありますれば、釜も柄杓も匙も皆かねで拵へて差上げます。それ迄何分お繰り悪くもこらへて下さるやうに」と申されました時は、思はず涙がこぼれました。私共三人口を揃へて「あなたのやうにおつしやつて下されば、釜や柄杓が只今の儘でも何程も辛抱致しますが、只皆様が私共の事を我儘だ我儘だと仰せになりますから、つひ申さで宜しい事迄私共も申すやうになります」と申しましたら、「いや、皆も私と同じ考だから、それを樂しみに願ひ申します。外の皆様へもお話を願ひたい」と申されました。私共三人「仰は皆に傳へます。さぞ皆喜ばれます事でありませう」と申しましたが、さすが社長と申されます方程あつて、人を使ふ事がお上手だと後々になりました感佩致しました。

此の情あるお言葉を歸場後一同へ傳へました。皆非常に喜ばれました。無理

に休業にして歸られた方々の内には、お宅でお叱られになりました方が大勢ありまして、歸らねばよかつたとこぼしてお出になりました、私は心中一入をかしく覚え、笑を忍んで居りました。其の頃は皆無慾な人ばかりでありましたから。

元方一同の苦心 大里夫人の繰糸

——富岡歸り一同の決心並に元方への申込み——

扱糸も追々繰り進んで參りますが、とかく座繰のやうに目が出ぬといふ所から、大里氏初め一同心痛して居られます。大里氏が折々私に「いもつと能く煮て繰るやうに言つて呉れ」と申されますが、此の一事は如何に大里さんのお頼みでも従ふ譯には參らぬと思ひまして、「其のやうに煮て繰りますと糸が悪くなります」と申して居りますので、御自分に繰場へお出になりました、「いもつと能

く煮てとつて下さい」と申されますが、私共仲間一同決して聞きませぬ。蔭で「生絲こそ習つて来たが練絲なんか習つて来やしない。いくら煮ると言はれたつて煮るものか」と一同で申して居ます。

そこで思召通りになりませぬ所から、元方一同御相談の上と見えまして、ある日大里夫人（里子様）が練場の南側丁度釜場の通りの釜にお付きになりました。やがて繭を五合とも思ひます程煮釜の中へお入れになりました、ぐつぐつぐつ煮てお出になります。繭が水色を通り過ぎて鼠色になりますと、そろそろ口をすくつてお繰り始めになります。ふしこきの代りに髪の毛を付け、友よりは五分程かけて（友よりは親指と中指一ばいに広げただけ、曲尺六寸が規則）座繰の通りに付けてお出になります。又口をお立てになります時もやはり座繰の通りに箒を丸で湯の中へ入れてお仕舞ひになりました、すべて何事も座繰に違ひませぬ。私共仲間の人達も元方を折々見て居ますが、一向平氣で居ります。

やがてどうやらかうやら二升お上げになりますと、其の絲が絲揚場へ参りました。大枠に其の絲を外の絲とならべてかけました時は、丁度只の絲と玉絲程違ひます。しかし私共は何とも申しません。其の内にそれを結びますと、目方が二升で二匁位違つたやうに思ひます。すると元方のどなたか「富岡歸りの奴等が頑張つてばかり居つて目方を切らす。こんなに目が出るから、是から何と言つても皆にあの通り煮てとらせる」と申されました事が、私共仲間の耳に入りました。扱此のやうな事を聞きましたる所の私共仲間の腹立はどのやうでありましたらう。是迄に一度もない腹立で、皆一同「もはや此のやうな所には居らぬ。あんな煮くされ絲の節だらけな物と私達のとつた絲と一つにされてたまるものか。皆一緒に歸りませう」と申します。私が「先づ歸る事は何時でも歸れるから、しばらく待つて、元方の人達も分らぬから此のやうな事も出来るのだから、私共がとつた絲とお里さんのおとりになつた絲を横濱へやつて西洋人

に價を付けてもらつて呉れ、もし餘り値が違はなくて、煮てとつは方が製絲場の利益になるやうなら、其の時は煮てとりませぬ、是非見て貰つて呉れと申す方がよい。西洋人に見せれば大丈夫、決して煮てとるやうにはならぬ。皆が今歸つて仕舞へば、富岡で苦勞したのもここで苦勞したのも水の泡になるから」と申しますと、「成程是は面白い」と一同同意でありまして、それでは元方の人達を呼んで來る方がよいと相談が一決致しました。所は私の部屋なのでありまして。

そこで帳場へ參りまして、「誠に恐入りますが、少々申上げたい事がありますから、北部屋迄皆様にお出下さるやうに」と申させました。其の前から富岡歸り一同晝食後場に付きませぬので、又何ぞ苦情が始まつたと心配して居られました事でありませぬから、直に大里様中村様土屋様宇敷様打揃うて、中々御決心の様はお顔にあらはれて居ります。其の時の皆々様のお顔は未だ目前に見ゆる

やうに存じます。又何時も仲裁ばかり致して居ります私迄此の度は一緒になつて居ります事でありませぬから、實に何とも申されぬ御心配の御様子も見えて居りました。

扱此のやうになりますと、皆後へ後へと引下がります。中には後の方でくつくと笑ひます者迄ありまして、誰一人前に出て申す者がありませぬ。私は年が少う御座いますから、皆様如何と控へて、和田さんあなたからと申しましたり、酒井さんあなたからと申しますが、皆後へお引きになります。和田さんは非あなたと申しますと、「お英さん申して下さい」と申されまして、中々出さうにもなさいませぬ。そこで何時迄其のやうにして居りましても果しが付きませぬから、私が申す事に決心致しました。

「私は若年でありますから、皆様からお話を願ひたいと存じましたが、皆お申しになりませぬ。私は此の頃糸も繰つて居りませぬから、皆様のお取次を

致します。」

と、此のやうに前置を致しまして、

「扱今日皆様方にお出を願ひましたは別の事でもありません。此の度お里さんが絲をおとりになりました、目方が多く出ましたに付、私共一同にもあのやうに煮てとらせると仰せられたと申す事を私共承りました。一應御尤ものやうであります、私共とて煮てとる位なら富岡迄態々修行には参りませぬ。生絲こそ習つて参りましたが、練絲は覺えて参りません。つまり價が分らぬから皆様も御心配になります事でもありますから、お里様のおとりになりました絲と私共が繰りました絲、双方横濱へお遣はし、西洋人に價を付けさせて下さいますやう、萬一餘り双方價が違ひませんで、煮てとります方が製絲場の御利益になると申す事になりますれば、何も國の爲でありますから、一同改正致します。何を申すも西洋人を相手の事でもありますから、其の方を聞か

ぬ先には決して改正する事は出来ませぬ。尾高様へ對しても濟みませぬ。是は私の考で御座いますが、板に譬へて見ましても、鉋をかけぬ板とかけた板では、申す迄もなくかけぬ板が厚くて量かさが多くあります。それで價はどうかと申しますと、薄くて量の少ないかけた板の方が價が高う御座います。此の道理から見ましても、目は少々切れましても價が高くありますれば、良品を製します方が國の爲と存じます。」

と一つづきに申しました。すると元方の方々もどなたも何とも申されませぬ。稍あつて、大里さんがそろそろお口をお開きになりました、「皆様の仰も御尤もであります、實は人の絲をとつてやるのでありますから、其の方から目が切れる目が切れると小言を申されますので、あゝもしたらかうもしたらと心配を致しまして、家内が嫌だと申すのを無理に繰らせたやうな事で、決して皆様に迄あのやうにして下さいと申す譯ではない。せめて皆様方の内でも目の出る方

と切れる方がありますから、出る方のやうにお繰り下されば宜しいから、是迄通りにお繰り下さるやうに」と申されました。一同「幾重にも氣を付けて繰ります」と申しました。私は再三絲を横濱へお出し下さるやうと申しまして、それで落着致しまして、皆一同場に歸りました。

しかし雨降つて地かたまると申す諺の如く、何時も仲裁ばかり致します私が、當るべからざる勢ひに申しましたから、とても申してもだめだとお諦めになりましたか、其の後は製絲の事に付きましては一言も小言を申されません。しかし横濱へ問合せもなさらず其の儘に打過ぎて居られました。

此の出来事は何月でありましたか月も日も忘れましたが、九月末か十月初頃ではないかと存じます。私が洗濯をして置きました品を持たせて遣はします事が折々ありまして、其の日長屋の茂吉と申す男に持たせて遣はします次手に、屋敷に出来ました葡萄を皆様上げるやうにと申して澤山よこしました。丁度

談判最中でありました。其の後私が休に歸宅致しますと、母が「此の頃茂吉を遣はした時、何ぞあつたのか。茂吉が歸つて、『今日はきかやがさわがしい様子で、お嬢さん初め富岡からお歸りの皆様と元方の人達が皆二階に集まつてお出の様子で、皆お顔付が違つて居りました』と申して居た」と尋ねました。(此の男は無筆でありましたから、何でも似た音でさへあれば宜しいと思つて、機械をきかやと申します。只今に折々此の事を申出しては笑ひます。)右様に母に問はれましたから、残らず話しましたら、「それはよい所へ氣が付いた」と申して居りました。

後で考へますと、里子さんもこの時は嘸お嫌であつたらうとお氣の毒に存じます。お年は三十一位におなりのやうに覺えますが、誰でも修行した人の前で知らぬ事を致します程氣の引けるものはありませぬ。座繰こそお上手にお繰りになりましたらうが、其の頃の檜舞臺とも申す可き富岡で修行した大勢が並んで居ます中で、御存じのない蒸汽機械の糸をお繰りになります事でありませぬか

ら、大里さんの仰の通りおいやだともお申しになりましたらうが、何を申すも六工社の立潰れにかかはる事とお思ひになりました、おとりになつた事に相違ありません。それをお氣の毒とも思はず、皆一同「能く私達の中であんな節だらけな絲を恥かしいとも思はずとれたものだ。押しよいよ程がある」などと申して居りました。私は何とも申しませんが、心中は皆と同感で居りました。其の後本式にお習ひになりました、一心不亂にとつてお出になりました。中々能くお出来になりました。私共に世話をおやかせになりますやうな事はありませんでした。其の内、御幼名忠彌氏只今の忠一郎氏を御妊娠になりましたのでお引きになりました。

しかし此の一條に付きましては、後日に至り大里さんが私に折々お申出しになりました、「實に知らぬ時といふものは、あんな事を申して、今になつて見ると實に面目次第もない」と申されます。私も申しやうもありませんから、「あの

時分には私共の強情を張りますのにずるぶんお困りでありましたらう」と申しますと、「能くあれ迄におつしやつて下さいました。もしあの時私共の申す事を素直に聞いて下さつたら、今日の名譽は得られなかつたのであります」と、何時も何時もお笑ひになりました。そして私共仲間の人が少しでも煮過ぎますと、「いづぞやあんな事を申して置いて、こんなに煮ると練絲になつてしまひますぞ」とお笑ひになりながら申されますので、皆一同笑ひました。實に私共も一生懸命で強情を張りました事が、後の名譽の種になりましたのでありますから、こんな喜ばしい嬉しい事はありません。私は別して、思ひ切つて大里さんの奥様のおとりになりました絲を悪いと申さぬばかりに大里さんの前で申しました事がありますから、實に名譽にでもなりません時分は申譯がありません。

折紙付の工女

私共が何故其のやうに立腹致しましたり、元方一同の前をも恐れず立派に申しましたかと申しますに、是には深き原因がありました。私共が退場致しました時、どの位尾高様がお喜びになりました事やら、額に致して製絲場内にかかりますやうと仰せられまして、御書物を一枚宇敷氏へ賜はりました。是は横長の紙に、

『縹婦勝兵隊』

と申す御文で、御名前に御印章が据ゑて有りました。私は一度拜見致しました。其の時心中、是を場内にかけて置きましたら人が何とか申しはせぬかと思ひましたが、大里さんも其の故か御表具も遊ばしません様子で、其の後一向見受けませんでした。

此のやうな立派なる、私共身に取りましては折紙とも申す可き御書物を頂きました私共は、全世界に自分等が縹りました絲を非難する西洋人は無いと迄信

じて居りました。繭が悪いから見かけの悪しき事は致し方ないが、縹り方に於て。しかし此の御文を人が御覧になりましたら(殊に軍人)さぞ立腹される事でありませうが、日本全國の模範に政府から立てられましたる大工場の長たる人は、此の意氣組でなければ勤まりますまいと、只今に折々考へて居ります。此の文の事を母が承りまして、尾高様も軍學を御存じなのであらう、『富國強兵』と申すからと申しました。

此の富國強兵と申す事に付、一條の悲惨極まる物語が私共一族の身の上にあります。こと長くとも慈善の御心のおありになります方は、下に認めますくだりの物語を御覧下さいますやうに偏へに願ひ致します。

富國強兵と横田家の悲惨

祖父は甲州流の軍學の師範を致しました人であります。常々富國強兵と申し

て、何程兵が澤山あつても國が富まねば強い兵を仕立てる事が出来ぬと申しましたとの事でありました。

私の母に一人の兄がありました。幼名熊人、壯年になりまして九郎左衛門と改名致しました。此の叔父が幼少の頃から文武兩道を心がけましたが、殊に祖父の教育を受けまして軍學には達して居りましたとの事で、富國強兵と申す事も心得て居ります所から、何卒して國を富ませたいと心痛致しましたが、何分松代藩の舊領分は山間の事でありますから、徳分と申す物が少しもありません。上下やうやう生計を立てて居る位の事でありますので、どのやうにしたら國を富ます事が出来るかと、日本全國を廻り見極めたいと申しますと、祖父も快く許しまして、幸ひ同志の人もありまして三四名同行致されたとの事であります。西は日向大隅より北は奥州の果迄と申すやうに、全國残る方なく遊歴致しましたとの事であります。只今の世なら僅の日數で巡られますが、交通不便の六十

餘年以前の事でありますから、永き年月かかりまして、歸國致しまして申しますには、「何地へ參つて見ても、湊のある所船の出入のある所でなければ國が富んでは居らぬ」と申しまして、幸ひ松代には千曲川があるから、是を利用して、越後の大瀧を切割り、物産を交換致したなら、土地も繁昌致すであらう。其の頃至つて越後は大豆小豆の出来ぬ國だから、松代領分の農家で肥料に挽潰す大豆を彼の地へ遣はし、彼の地でとれる鯡・鱒其の他の魚類の肥料を持歸り、農作物の肥料に致したなら、一舉兩得と申すものだから、此のやうにして何卒松代の盛んになるやうと思ひ立ちまして、祖父に申しますと、至極同意であります所から、早速願書を認め、松代公へ願ひ出しますと、是も許可になりましたが、其の頃の事であります、徳川へ願はねばなりません。願書を出します迄に越後國大瀧へ出張致しまして、繪圖を引きましたり地理を調べましたり、是が中々書盡されぬ程面倒を致しまして、いよいよ出来上りました所で、祖父が江

戸表へ出府致しまして、願書を差出すやうになりましたが、中々其の頃願書を出しますには、松代藩の留守居役の手を経て徳川の役人の所へ差出すのでありますが、此の費用が大したものだと申す事があります。何故と申せば、松代の留守居役へも徳川の役人へも進物を澤山遣はねば、其の頃決して許可になりませぬ。徳川の役人の手元迄参ります迄に留守居役へ何程反物其の他持つて参つたか分らぬ程だと申します。秩父や八丈位持つて参りましても、細君などが、「おや、お氣の毒な、お止しなさればよいのに」と申して、碌々禮も申さず、わきの方へ突遣つて居つたと申す事でもあります。此の人の名字は存じて居りませんが認めませぬ。其のやうな有様でありますから、徳川の役人の事は推して知るべしと申す位だと申す事でもあります。此の間が中々長くかかりました様子で、物に物をかけてやうやう許可になりますと、追々同志の人も出来ました。竹内八十五郎(象山先生の初學の師)金兒忠兵衛等の人と飯山町安次郎川田村又右衛門な

どの人々と、下廻り芝村彦四郎などもありました。徳川から船八十艘の許可が出まして、其の時日の丸の旗が船の數だけ下つたと申す事でもあります。

それより大瀧へ出張致しまして、いよいよ工事にかけますと、堅き岩の事でもありますから鶴嘴一打にお煎餅位岩が缺けます位、(只今ならダイナマイトでも用ひますれば譯はありませんが)人夫を澤山使役致しましても中々はかかりません。其の他川底に岩石がありますのを浚ひます、道を造るとか筆に盡し難き困難も致し、費用もかけ、此の間が幾年程かかりましたかは覚えませぬが、中々長くかかりましたとの事、此の間に徳川の役人が見聞に参りましたり、祖父が出府致したり致しまして、其の費用も中々ではなかつたとの事でもあります。何分國を繁昌致させたい一心で續けて居ります。其の間に船も製造致させたり、大瀧へは無論出張所を置きまして、家具其の他横田家から持つて参りましたのであります。土地が非常に開けぬ所で、男女の見分けも付かぬ位な所だ

と申します。どうやらかうやら不完全ながら船の通るやうになりました所から、初通船に彼の地(越後)の産物を満載して、芝浦と申す松代より二里の(千曲川の内の名)所へ帆掛船が着致します日は、松代公も殊の外お喜びになりました、菱のお茶屋(信玄公のお茶屋、武田菱の御紋が付いて居りますので。一名田植のお茶屋)へお出ましになりました、遠目鏡で御覧になりましたとの事で、横田家一族の喜びは申す迄もなく、同志の人々も此の位喜んだ事はないとの事であります。それで持参りました所の産物は、松代公に献上致しましたり、又親族知己へも遣はしたり致しまして、是より追々通船の數を増す毎に土地も繁昌致すであらうと喜び勇んで居りますと、徳川から『大瀧通船差止め』と申渡されました。一同の驚きは如何ばかり、とても筆にも口にも盡されませぬ。其の頃の事でもありますから、此のやうになりましたは力に及びませぬ。それでも手に手を盡しました様子でありますが、徳川は松代の繁昌を極く嫌ひます所、謀叛でも企てはせぬ

かとの疑ひからであります。

それで叔父も決心致しまして、もはや力づくでは及ばぬ、此の上は學問の力で自分一代に是非成功致さねばならぬと申しまして、中々斷念致しませぬ。同じ學問をしても、國で致してはとても志を立つる事が出来ぬからと申しまして、江戸表へ出府致しまして、徳川の御儒者林大學頭様の塾へ入り、政治學を修行致す事になりました。修行年間三ヶ年、入塾致しまして身命をなげうつて勉學致しました事でありますから、上達も早く、大學頭様のお目にも止りまして、叔父が軍學を致します事をお聞及びになりました、折々御前にお招きになりました、叔父の軍學の講釋をお聞きになりましたは、「横田の軍學はうまい物だ」と御賞詞を賜はりましたとの事であります。叔父も師と敬ひます所の大學頭様のお見出しに預りました事でもありますから、喜び勇んでいよいよ勉學致して居りましたとの事であります。

二ヶ年半を過しまして、いよいよ今秋卒業と申す七月中旬、神は此の國益を計りましたる所の横田の家へどこ迄不幸をお與へになります事でありましたらう。叔父は風邪の心地と申して休みましたが、追々容體が悪くなりまして、醫師が傷寒しやうかんだと申されましたとの事に、一同驚かれまして、早速飛脚を國元へ差立てて下さいました。

此の便りを聞きまして、祖父初め一家の驚きは一通りではありませぬ。祖父は直に出立致しまして、夜を日について板橋迄参りますと、此方より差立てましたる所の飛脚と行逢ひました。

此處迄認めますと、筆が動かぬやうに覺えます。行年二十八歳。

叔父は終生忘れぬ無念の涙をのんで同月二十五日死去致しました事を知らせの飛脚でありました。祖父は此の報を得まして、狂氣の如く急がせまして、着致しますや早々、看病に手を盡された人々に禮は申さず、飛脚を遅く差立てら

れました事を責めましたとの事であります。幸ひ從弟の禰津繁人と申す人と眞庭と申す全國遊歴に同行した人々が一緒に居られましたから、十分看病して下さいましたのに、其のやうなる事を申したと折々母が申譯ないと申して居りました。

叔父は常々、火葬は罪人を致すもので、決して我々の身體を火葬には致さぬと申して居りましたとの事で、江戸表に於て葬式を致しました。眞田家の御菩提所赤坂の盛徳寺へ葬りました。墓には『横田九郎左衛門之墓』と書付けてあります。横に林大學頭様御長男某様の御文が切付けてあります。國元へは遺髪だけ祖父が持歸りましたとの事であります。

扱此の叔父には七年前から言名付の未來の妻がありました。此の人は松山丁前島源藏(種ヶ島の師範にて、象山先生の元の師)と申す人の長女(私の父の從妹に當ります人)名は忘れましたが美人で賢い、女子一通り以上何も出來ぬといふ事の

ない才色兼備へたる所の人でありましたとの事、松代の風として約束當時より横田家へ出入して居られました、忙しき時は手傳つたり閑な時は遊んだりして、母には姉妹の如くむつまじく、祖母は母以上愛して居りましたとの事でありました。

叔父も此の人も年頃になりました所から、是非結婚して安心させて呉れと屢々すすめても、此の一事ばかりは兩親の命に従ひませぬ。三十歳迄は妻帯致さぬ決心だと申しまして動きませぬ所から、此の心中を見抜きましたる祖父は、其の意に任せ林の塾へ入る事を許したとの事であります。月花も及ばぬ未來の妻の姿も大事件をかかへましたる所の叔父の目には、見えなくてもそれ以上の望みには代へ難かつたのだらうと存じます。それを母が私共に迄申聞かせまして、「叔父さんは自分の慾を捨てて國の爲を思つてお出になつた」と何時も目に涙をためて申します。

叔父は至つて孝心深き人で、父母の命に一度も背いた事は無いのみならず、外出致して歸りました時は申す迄もなく、朝夕機嫌聞きに參りまして、四方山の物語又は見聞致しました事を兩親に申聞かせ、其の心を樂しませんと勤めて居りましたが、ことが人様の事に涉り祖父が思ひ違ひ等を致しました時には、祖父に意見を致しまして、何程祖父が立腹致しましたが、言葉を正しく致し顔を和らげ幾度も幾度も諫めまして、得心致しました様子が見えますと其場を引下りましたと申します。

私の母は、八歳の時實母が死去致しまして、九歳の時後の母が參りましたが、兎角慈母のやうに參りませぬから、叔父がいたはりも致し申聞かせも致しまして、旅並に出府致しました時も母へ手紙を遣はしまして、父母へ孝道は申す迄もなく手習縫針琴などの稽古を勵みますやう申越しました。私共も残る手紙を見ましては、此のやうな兄が欲しいと存じました。

祖父が遺髪を持歸りました時の一家の愁傷はどのやうでありましたらう。皆其の歎きは違つて居つたと思ひます。祖父は此の子をして年來の望みを果し、老後も楽しく送られるであらうと思ひました事、祖母は自分が見立てましたる所の嫁と一代樂しき月日を送られるであらうと樂しんで居りまして、此の嫁と別れねばならぬやうになりました事、母は慈母なく冷く情なき悲しみも叔父によつて慰められ、一生慈母の代り師の代りと樂しんで居りました事も皆悲しみの種となりました事、一家は思ひ思ひの悲しみに闇の如くになりました。世間の人々からは、此の悲惨極まる横田の一族を氣の毒だと申した人もありますが、多くは「山をするからだ」と申されましたとの事でもあります。叔父の死去は壽命でありませうが、皆決して其のやうには思ひませぬ。幕府の非道がなかりせば出府は致さぬ、宅に居れば此のやうにはならぬ、成功を見ながら差止めにならねば「山師」だとは言はれぬと、一家悉く徳川の非道を恨んで居りました。

祖父は此の事件に付、悲しみは通り過ぎて物事に打腹立ち、生來の短氣な人が益々募るばかり、それを見ます母の心中は只、叔父が居りましたら此のやうな時と、何事も叔父のみ思ひつづけて日を送りましたとの事でもあります。

扱此のやうになりますと、昔の武家の事でもありますから養子を貰はねばなりません。母は此の翌年さる門閥に縁組致します事に約束がととのつて居りました。殊に祖母の心に叶ひましたる兄嫁に養子を致します方納まりも宜しからんと思ひまして、再三其の事を申しましたが、祖父が血筋が絶ゆるとて「其のやうな我儘はさせぬ」と申して聞入れません。いよいよ養子をとる事になりますと、所々方々から申込がありまして、武器馬具衣服調度十二分にしてやると申す門閥、又は持參金のある人等澤山ありましたが、皆斷つてしまひます。末に祖父から申込まれましたのが私の父であります。父の實家は松山丁で、齋藤龜作と申す人の弟で謙吉と申しました。(祖父は雲平、其の次男が私の父)此の家は至

つて小身でありまして横田家の三分の一程の知行であります。殊に父は兄がかりの身の上であります。文武兩道に勵んでは居ましたが、五節句の付届け又盆暮の先生への禮なども祖母の内職と父の魚とり山行き等の品を賣りまして、やうやうに間に合せて居りました位の父に、どこか見所があつたと見えまして申込みました所、先方では「高も違ひ、衣類其の他の用意が届かぬから斷る」と申す返事がありました。又押返して「本人さへ呉れて貰へば衣服其の他は決していらぬ、九郎左衛門の脱殻だつがらへ入るから」と申す祖父の望みに、先方も承知致しまして、叔父の死去の翌年母の十八歳の時十二月二十四日に横田家へ引越しまして結婚致しましたとの事であります。初めて佛壇へ禮拜致します所を祖父が見まして、先づ先づ禮式も十分習つた人だと喜びましたと申す事があります。衣服其の他も齋藤の祖母の丹精で一通り持つて參ります。殊に祖父が驚きましたのは、其の頃武士の魂とも申すべき刀は、作りは庵末でありましたが中身が

實に立派な物二腰迄持参りましたので、其の心がけに感心致しましたとの事でありました。父の實父は刀道樂とも申す位の人であつたとの事があります。扱あつかいよいよ養子となりました父は、四歳の時大病を患ひ、やうやう八歳の時隣迄一人で参りましたと兩親で喜びました位でありますから、全快致しましたのが十一二歳の頃で、とても育つまいと申す兩親の考から、手習にも上げず申さば捨育てと申す有様で過しまして、十三歳位から武藝の稽古に参りましても無筆であります。皆外の人は讀んだり書いたり致しますので父も恥かしく思ひまして、十五歳の時初めて望月と申します先生の所へ弟子入致しまして、其の頃六七歳の人の習ひます大學から教へを受けましたとの事ではありますが、習字は入門の期が遅れまして一人で習つて居りまして、一生懸命に勉強致しましたので、二十二歳で横田家へ参りました時は、其の頃の人並みより少々立優つて居りましたとの事があります。

叔父の後へ参りました事でありますから、祖父が中々やかましく申します。此の頃の方ならとても御辛抱は出来ずまいと存じます。其の頃もし實家へ歸りますれば一生日陰者で終らねばなりません。其の頃の父の苦痛はどのやうでありましたらうと實に察します。しかし叔父の教育を受けました母は決して世間通例の内娘婿取りのやうな行ひはありません。父を敬ひ慰め勵まして、實に睦しく暮しました。是で父も辛抱する事が出来たであらうと存じます。父も叔父に及ばぬ事をよく承知致して居りますので、祖父から何を申されても決して腹も立てず、一心に勉強して居りました。母は、日々祖父母から六つかしく申されますのの中に入りまして、双方へ氣を兼ねました苦心はどの位でありましたらう。私共が覚えましてもたえず喧しく申して居ますので、母が折々「叔父さんさへお出なら此の様な事は無い、私は外へ行けばどの位合せだか知れぬ」と申しました。此の家内一同苦心に日を送りました事を親類の人でも知りませ

ぬ。祖父も宅でこそ六つかしく申しますが、親類の人にでも父が叔父に及ばぬなどと申しませぬ。祖父が鳴物を好みますので、大勢の小兒のある中から母が折々琴三味線など弾きまして祖父を慰め、又叔父が生前心添へを致しましたる事を忘れぬやうにと申して居りました。

かかる中にも國益を計るは叔父の無念をはらす爲めのやうに一家残らず思つて居ります所から、父も先代の志を受けて、扱こそ人様もお出しになりませぬ所へ私を遣はすと申しましたのであります。祖父も半丁程先の手習場へさへお轉婆になると申して許しませんでしたにも拘らず、國の爲と申す所から喜び勇んで私を遣はします事を許しましたのであります。又母も大勢子供のあります中、殊に妊娠中にも拘らず一言の不同意も申さず承知致しましたのであります。私も一家の有様を幼少より見聞致しまして、此の度自分を一家共同喜び勇んで遣はします心中を言はず語らずの内に承知致して居りますから、同行皆様のやうに

無念と申す事にお出合ひになりませぬ方々とどうしてまあ一つ心で居られませう。一身を捧げて此の大任を果さねばならぬ、しかし私は實に無器用で、そして不甲斐なき生れつきなれば、此の大任を果すやうな事が出来ぬやうな事がありはせぬかと不安心でたまりません所から、神佛の御力を願はねばならぬと、毎朝一時間位づつ人様より早く起き祈念をこめましたのであります。とても私一人只人様の上に居つて名譽を得たいなどと申す一身の爲位の事なれば、筆頭になつて歸られるやうな私ではありませぬ。只々身に叶ふ事で祖父や兩親の心を少しでも安められる事が出来るならと修行中は思つて居りました。

又六工社へ参りましたは、父が先立つてお奨め申しました此の製絲場が不成功に終りますれば、世間の人に忘られて居ます所の大瀧一條も又人々の口の端にかかり、先代もあ、だから又此の度も人を奨めて此のやうな事になつたと申されるであらうと存じます所から、人様の思召も自分の年をも打忘れ、大里様

初め元方御一同や仲間の人々の前をも恐れず自分の考通りを申すのであります。以上記しましたやうな事情がありませぬば、私とて僅か十八歳位の年で此の勇氣は出ませぬ。親を思ふ一心程世に恐ろしいものは無いと只今でも十八歳位の娘さんを見ます度毎に思ひ出します。其の時は其のやうにも思ひませんでした。が、さぞ皆様が年に似合はぬ出過ぎ者だと思ひになりました事であらうと存じます。ふだんは人様にお話もろくろく出来ぬ私も、此の業に付きましのお話になりますと心にありたけの事を申して居りました。其の勇氣の原因は皆叔父が地下に眠り兼ねて居ます所の『富國強兵』が元で、此の私に迄此の勇氣を與へましたのであります。

以上記しました物語を御覽下さいまして、萬一私の叔父を氣の毒な人だ、其のやうな人があつたかと思召して下さい下さる方がありますれば、私は此の上の喜びはありませぬ。叔父が常々、

『子孫の繁昌を思はば宜しく善事を積み。』

と母に申聞けましたとの事であります。もし叔父が私慾の爲に致しました事なれば、財産を使ひ盡し負債迄澤山ありました所の横田の一族、只今頃居どこ立ちどころにも迷つて居ます事でありませうが、先づ其のやうな事もなく居ますのは、全く叔父が積みました善事が報つて參るのかと存じます。私などの苦心致しましたのは目に見ゆる業の事でありますから物の數にもなりませぬが、弟共妹共は父なき後の苦心私以上苦心に苦心を重ねました事と察して居りますが、互に親兄弟に心配をかけまいかけまいと力めて居ますから、其の身の外知つた人はありませぬ。弟等が只今の地位迄こぎ付けましたのも一朝一夕の事ではありませぬ。六十年の昔祖父と叔父とが種を蒔き、兩親によつて培養され、只今やうやう實を結び始めた所であります。此の弟どもを見るに付けましても、叔父の賜物と氣の毒の事を一日片時も私は忘れません。折ふし墓參りを致しま

して自分の心を慰めて居ます。

私は何故人様より一時間も早く起きて神佛を拜しましたかと申しますと、是にも譯があります。母は叔父の死去と同時に神を祈ると申す事を止めましたとの事で、もし神が利益りやくを與へて下さるものならば叔父さんなど死去は遊ばさぬ。お前達も決して神信心は致さぬやう」と申付けられました。しかし私は實に不甲斐ない生れつきでありますから、此の一事だけは母の申付けを守る事が出来ませぬ。身に應じない大任を自分の力ばかりで果す事が不安心と思ひます心の弱みから、親の申付けを背いて信心致しましたが、此の事を母が知りましたら嘸不快に感じますであらうと思ひまして、人の起き出ぬ先に心ゆく迄十分に祈念をこらしましたのであります。只今考へましても、私共のやうな學問の教へを受けぬ時代の若き娘などには神信心は誠によい事と存じます。兎角氣の變り安き頃、毎朝神を祈ります時は、決して嘘偽りは申しませぬ。神に向つては必

す我が本心を打明けます。其の本心を神の前で曲げた事は申されませぬ。朝誠を神に祈り、其の日曲つた事を心にも思ふ譯には參りません。一日の事は朝に有りと申すは實に金言であります。業の上達せぬ時は未だ未だ自分の一心が足らぬと思ひ、幸ひあれば神の御力と思ひ、決して一時半時たり共心に油斷がありません。私など若き時、萬一寝忘れて皆人様が起きられて、心ゆく迄念じる事の出来ぬ日は何となく氣分が勝れませぬやうな感じが致しました。神を祈る位な者が決して自分で怠けて居る事は、神に對して出来ませぬ。是が私の心でありました。

大里氏と四百廻

其の頃目が切れます事を心痛致されます所の大里氏が、私が創業以來一日も缺かさず一人に付二つづ、四百廻をとつて居ますので、折々お出になりました

は、「横田さん、そんなにとらないで置いて下さい、目が切れて困るから」と申されますが、此の一事は決してお言葉に従ひませぬ。いつも笑ひながら「此の事ばかりはいくら大里様の仰でもお聞き申す事は出来ません。繭が悪いから糸の見悪いのは仕方がありませんが、六工社の糸にむらがあつたと言はれましては、六工社の恥になります。小さく申せば六工社の恥、大きく申せば國の辱、何を申すも西洋人を相手の仕事だから、私がここに居ます内は此の事ばかりは止めません」と申しますと、いつも苦笑ひをして、「さう言はれると困るなあ」と申されました。如何に目の切れる事を心痛致されましたか、又如何に賣込みの時西洋人から突かれる事を御存じ無かつたかは此の一事でも分ります。又私が如何に此の業に付きまして強情を張りましたかは此の言葉でもわかります。仲間の人でさへ、其のやうに毎日々々ならないで呉れ、少しは樂をさせて呉れと申した人もありました。

六工社の夜學

追々日が短くなりまして夜が長くなります所から、元方御一同のお考か、此の夜長に空しく休んで居つては何にもならぬと申されまして、工女一同夕食後夜學を致す事になりました。讀書習字珠算とありました。私は富岡の巻にて記しました如く手習に参りませぬから、常に筆法を習ひたいと思ひつづけて居りましたから、大喜びで眞先に出かけました。

中村氏が丸山のお弟子で御家流を能くお書きになりましたので、同氏にお習ひ致します事に致しました。同氏が昔習はれました時の御手本を澤山お持ちになりました、工女の大勢にお貸しになりました。私も一本拜借致しましたが、實に恐入りましたのは其の多くのお手本を兩側から板で締めてありまして、一點の汚れも付かず一筋の皺もありませぬ、如何に大切に致されました事であり

ませう。さすが御老母の御教育と只々感佩致しました。そこで私は、「殘暑甚敷」と申す書出しの手本でありましたが、此の殘暑と申す二字だけに四晩か五晩かかりましたも筆法が丁度に出来ませぬ。中村氏もほとほと私の無器用に閉口致されましたと見え、「横田さん、あなたはお書きくづしになつたお手本だからお骨ばかり折れてそれ程效はありませぬ。それにお書きになる方はそれでお間に合つて居ますから、それより算盤そろばんの方を遊ばしたら如何です、何事にも入りま

すから」と申されまして、私も此の度こそと思ひました事、實に殘念に存じましたが、算盤も必要でありますから翌晩よりいよいよ珠算を同氏に習ひました。

一緒に習ひました人が十餘人でありまして、二一天作の五から致しましたが、相變らず覚えが悪う御座います。外の人々は覚えも能く珠の音も宜しう御座います。私は覚えて一生の寶に致したいと存じまして、一心に致して居りました。追々覚えまして、九の段迄上りました所で八算惣まくりをすると達者になると

申されまして、毎夜毎夜致しまして、部屋へ歸りましても十二時過迄はじいて居ます。しかし折角出来ましても湯に入りますと大かた忘れて仕舞ひますので、二三日も入湯致さずに居つた事もありました。やうやう見一になりました時は初の十餘人が私共に兩三人になつてしまひました。私は相變らず致しまして、商賣割になりました時は私一人になりましたが、やはり續けまして、たうとう一通りわかるやうになります迄御教授下さいました。其の後は萬事算盤で致す事が出来ました。只今も日々用立つて居ますのは、全く六工社の賜物、又無器用なる私に是迄に御教授下さいました中村氏の御厚恩、何時の世にか送る事が出来るでありませうやと存じつづけて居ます。其の時書いて頂きました帳面は記念の爲め大切に持つて居ります。

夜學には元方惣出にて御教授下さいました。大里様は讀書習字、中村氏は習字と珠算、土屋氏は習字と珠算、宇敷氏は讀書と習字、工女方も皆喜んで大方

毎夜出られまして、中々盛んでありました。

六工社と小野組

此の頃、只今の銀行と同じやうな仕組みの小野組と申すが上田町カミタマチにありました。六工社で繭は此の手から間に合せて居られるやうに大里様がお話しになりました。(但し金子のやうに私は見受けて居ました)。大里様は小野組の事をお店たなと申されまして。

或日私に「お店も段々むづかしくなつて潰れるかも知れません。其のやうになりますと六工社も戸を閉たてねばなりません」と實に實に心配さうなお顔で申されまして、私も心配で心配でたまりませんでした。しかし此の事は仲間の人達にも話しません。申しましたら皆騒ぎ立てるであらうと存じましたから、一日と心配で、元方の方々のお顔ばかり眺めて居ました。

日々少しづつ土屋中村兩氏岸田氏が買集めて參られまして、先づ先づ一日も繭なき爲めに戸を閉てるやうな事無しに十二月迄とり續けまして、同月十二日閉業になりました。

閉業祝と仕着せ

いよいよ明治七年十二月十二日、先づ先づ首尾能く閉業致しました。未だ海とも山とも分らぬながら、明年の事もありません、又富岡でお仕着せが渡りますからと申します所からか、一同へ仕着せが渡りました。唐絲縞の黒地に濃き鼠の三筋立でありました。それを十一歳位の少工女迄同じ事でありました。實に地味な柄であります。上の工女方へは裏表(淺黄金巾)、下は表だけ、夜具持參の人へはより、二把渡りまして、私迄貰ひました。

其の夜は閉業祝と申されまして、中々御馳走が出まして、お酒迄お出しになりました。南部屋は和田さんのお部屋、北部屋は私の部屋、席定りました頃、大里さんがお先立で元方御一同御出席になりました、第一番に大里さんが、

「扱皆様、本年は創業の際でありますから萬事行届きません。實に御苦勞をかけた。又明年も本年に増して御苦勞願ひたい。些か閉業祝の印ばかりであります、ゆるゆる召上つて下さいませやう、實はいま少し御馳走を致す考でありましたが、此の度お店たなが閉店になりました、其の方へ遠慮も致さねばなりません、旁々實に御龜末で申譯がない。又六工社が盛になりますれば其の時こそ何程も御馳走を致しますから、何卒御勘辨下さいませやうに。」と申されまして、第一番に私の前へお出になりました「段々有難う御座いました」と申されまして、お盃を下さいました。外の方は何も申されません。只お盃だけお持ちになりました、「御苦勞様でした、又明年も願ひ致します」と申されまして、日頃の濫いお顔はどこへやらと申す有様にて中々面白さうにして

お出になりました。私が實に閉口致したのは、工女方が一人一人皆私の所へお盃をお持ちになります。初はお吸物椀の中やお皿へお酒を明けて居りましたが、中々明け切れません。そこで私が好奇心にかられまして、自分も父の娘だ、どの位飲めるものか試して見ようと、とんだ事を考へ出し、中途から人々の下さるお盃を引受け引受け中々十五六杯位ではなかつたやうに覺えます。しかしどの位強いものか、酔ひますことは酔ひましたが、決して小間物店だの前後忘却だのと申すやうな事なしに、御飯も頂きました。只今考へますと婦人に酒、大禁物、私が皆様をおとめ申さねばならぬのに、とんだ所で自分を驗し、又人様にも上げましたのは實に申譯のない事だと思ひます。さぞ皆様方が驚いてお出になりましたらうと、今更面目次第もありませぬ。

翌十三日朝一同歸りました。先づ此のやうにして創業第一年の事業も一同心配の中から首尾能く仕舞ひ、元方工女双方笑顔で別れましたのは實に祝すべき

前兆かと存じます。

大里氏のお言葉で初めて小野組が閉店致しました事を承知致しました。

六工社よりの禮 私の心の迷ひ

十二月十三日歸宅致しまして、私は弟妹等の春着の用意又は家事に忙しく日を送つて居りました。同月末の頃ある日大里さんがお出になりました。直に母が出てお目に懸かりまして、私も傍に居りますと、大里さんが「年内は色々御心配をかけまして有難う存じます。お英さんには格別御苦勞願ひまして、お蔭でどうやらかうやら首尾能く閉業致しました。何とかお禮の致しやうも存じては居ますが、何を申すも未だ見込も立たぬやうな次第で心に任せません。是は社中一同の志の印迄でありますがお花紙でもお求め下さいますやうに」と申されまして、銀包に「御禮金五圓六工社」と上書きがしてありました。すると私は

一目それを見ますと、日頃の信心も打忘れ、心中にお禮なんか來るだらうとは夢にも思はなかつたが、此のやうに持つて來て下すつた、あれで何ぞ拵へて下さるだらう、何を拵へて下さるやらなどと思つて居ります。すると母が非常に迷惑な顔になりまして、「是は思ひも寄らぬ御心配を遊ばして下さいませぬ。未だ御利益も上らぬ内にお禮などは思ひも寄らぬ事、思召は頂いたも御同様、御持歸りを願ひます」と申して、大里さんのお前へ戻して居ります。私は心中、折角持つてお出になつた物をお返し申さずともよさうなものだなど自分勝手な事を思つて居ります。すると大里さんが、「其のやうに仰せられては私が困ります。是は私が一存で致しました事では無い、一同に代つて伺ひました。私をを持歸りましては一同へ對しても濟まぬから是非お納めを願ひたい」と申されませぬ。母が又「いや是はどうあつても頂く譯には參りませぬ。元より數馬がおすすめ申してお始めになりました六工社、數馬がお手傳ひでも致すべき所、娘が

少々働きました位にお禮などを頂きます事は決して出来ませぬ。やがてお利益のありました上に思召とありますれば御遠慮なく頂戴致しますが、此の度は平にお持歸りを願ひます」と、受引く様子もありませぬ。私はあのやうに迄おつしやるものをなど心中に思つて居ります。彼方へやり此方へやり中々果しが付きませぬ。母もつひつひ根氣負けをして、「其のやうに仰せられますなら、數馬が何と申しますか歸宅致します迄お預り申します」と申しまして、それで一先づ落着が付きまして、四方山のお話の後お歸りになりました。

お禮は中も改めず其のまま箆笥の引出しへ入れて仕舞ひました。慾に心の迷ひましたる私は、どうなる事かと心中には思ひましたが一言も申しませぬ。只父が歸宅して何とか申すであらうと心中に思ひつづけました。しかし私の家では先代からの家風とでも申しますものか、どのやうな事でも兩親の致します事子供が何とも申しませぬ。相談がありますれば銘々見込を申します。相談で無

い時萬一申しますと、「餘計な事を申すものでない」と申聞けられます。

先づ私の此の時の心中は如何に淺間しく如何に汚れて居りましたらう。是が神佛に身命を捧げて六工社の隆盛を祈念致しました私に相當致しますであらうか。實に小人罪無し玉を懷いて罪有りと申しますが、未だ玉も手にとらぬ先に「逢見ての後の心にくらぶればむかしは物を思はざりけり」と申す歌は戀歌であります、何事も見ぬこそ清けれ、心の汚れは目より入る事と思はれます。身命を捧げた程の事なれば、如何なる大切の品とても賣代なしても六工社の爲なれば惜しくは思はぬ筈、殊に兩親が付き居りました私、何不自由なく人中へも出られるやうにして呉れますのに、何を苦しんで此の利益も上らぬ、立つ潰れるもわからぬ六工社からのお禮で自分の贅澤品をもとめて呉れるだらうなど思ひましたやら、其の時の考は決して是が欲しいと申す考もありませぬ、只自分が働いたお禮、兩親の手からで無い自分の力でとれた金、其の金で何ぞ

拵へて見たいと申す、實に馬鹿々々しいつまらぬ考を持つて居りました。實に馬鹿々々しきは若き者の考であります。

父は其の頃長野に居りました。其の後歸宅致しました時、母がお禮の話を致しますと、以ての外不快の顔つきを致しまして、「お前も何で禮などを受取つた、返して仕舞へばよいのに、利益も上らぬ内にとつて置くといふ事があるものか」と申しました。母が「どのやうに申しても持歸らないで、私も據處無く預かつて置きました」と申しました。私も父の顔父の聲父の口上を聞きますと、夢から覺めたやうになりまして、やうやう自分の考違ひに心付きますと、實に實に何とも申されぬ程心苦しく感じまして、自分は今迄身命迄捧げて神佛を祈念致しながら、何故あのやうな汚れた淺間しい心を出したであらう、口にこそ出さね、實に濟まぬ事をしたと、大罪を犯したやうに思ひますと、居ても立つても居られぬ位であります、兩親も私の心の汚れを存じません。直に懺悔致した

いのは胸一杯でありますが、申したら嘸兩親が驚くであらう叱られるであらう、自分の子が此のやうな淺間しい心を持つかと嘸情無く思ふであらう、叱られてもそれは當り前だけれど、嘸情無く思ふであらうと思ひますと、もはや懺悔する勇氣は挫けて仕舞ひます。申して氣色を損ずるより申さぬ方がましならんと決心致しまして、此の事に付きましては一言も申しませぬ。すると父も母の物語を承りまして、「其のやうに申された所へ返しては却て心持を悪くするやうになるから、何ぞ重寶になる品をもとめて遣はず方宜しからう」と申しました。此の時私は初めて口を開きまして、「おとつさん、金の柄杓か匙かねを拵へさせてお遣はしになりましたら如何で御座います」と申しますと、父が「それもよからう。しかし五圓では何程も出来ぬ。やがて利益のあるやうになれば六工社で拵へるだらうから、不揃ひになると却て迷惑をするであらう」と申しました。(如何に木の柄杓灰ふるひ匙を心にかけたかは此の一言でも分ります。見かけが悪いからと申す

譯ではありませぬ。實に使ひ悪く時間が餘程違ひますから。兩親はあれかこれかと相談致しました末、父が、「どうで工女の賄をするから干物がよからう、何時迄置いても悪くならぬやうな品を」と申しまして、椎茸と干瓢を遣はす事になりました、五圓皆遣はしては折角の厚意を無にするやうで宜しくないと申しまして、此の二品を四圓五十錢程もとめて、おうつりとして長屋の和吉と申す者に持たせてやりましたが、其の頃價が下直でありましたから五幅風呂敷に一ばいありました。

私共仲間の人達はどの位でありましたか一向知りません。皆私より以下だらうと存じますが、互にお禮の事は一言も申しませぬ。いかに氣位が高かつたものやらと只今でも折々思ひ出して居ります。しかし内々座繰をとつた方が徳だと申された人が仲間にも新入にもあつたやうに承りましたが、表向では何とも申されませぬ。

其の後は自分で自分の心の汚れぬやう心懸けて居りました。叔父が申したと母が毎々申聞かせましたが、實に此の歌の通りであります。

「心こそ心迷はず心なれところに心心ゆるすな」

當地へ参りましても、お禮一條の私の心の迷ひは忘れませぬ。母に逢ひましたら話させうと思つて居ますが、外の話に實が入つて一度も思ひ出しません。後で又忘れたと氣が付きます。三十五年の昔犯しましたる心の汚れを初めて懺悔致します。世に若き人の考程當にならぬものは無いと、茲に書とめて置きます。

私は國元を出ましてから、製絲業に従事致しました事を誰にも一言も申しません。同じ所に十三年も居、姉妹も及ばぬ程親しく致しました人々にでも決して申しませぬ。申しますと私は前後も忘れて此の業の事を申しますから、其の人は私の親友でありますから實とも思はれますかも知れませぬが、他へ漏れますと、其の内には法螺を吹くとか何とか申されましては少しの益も無く、却て身の仇になります。どんな育ちをした者やらと兩親の事迄申されるであらう。其の業に従事して居つてこそ申す必要もあれ、何も申さぬに如くはないと心に誓つて居りました。しかし一日も忘れた事はありませぬ。

獨り居ます時は八年間の事を繰返し繰返し日々楽しんで居ます。汽車汽船又は近所の製造場などの汽笛の音を聞きましては、世界第一の音楽を聞きますよ。私の耳には楽しく聞えます。自分が従事致しました所の業が益々隆盛になりました、歸省致す毎に汽笛の數が増して参ります。此の業によつて松代も段々榮えて参ります。母も日々此の音を聞いて喜んだり楽しんだり致して居るであらうと日々考へて居ります。祖父も叔父も地下で此の音を聞きます時は百千の僧の讀經より嬉しく思ひますでありませうと、そればかり私は喜んで居ます。昔身命を捧げた業が今は自分の長壽の妙藥の如く、如何なる苦痛も此の事を思

ひます時には一時に忘れて、身の幸福を喜びます。かく認めましたとて、決して私の力で成功したの何のと思ひますのではありませぬ。大勢寄りましてこそ功も奏します。如何に一人で働きましたとて決して成功するものではありません。不成功に終わりましたら此の樂しき汽笛の音も地獄の鐘の音の如く、人は知らず共自分が聞いて命を縮める種となつたであらうと、其の事を片時も忘れず喜んで居ます。「末は雲助」の歌も昔語りの笑ひ話の種となりましたのは、實に嬉しく喜ばしく筆には盡されませぬ。

上記しました事は日記も無く日々私が繰返し繰返し二十九年の長日月心に秘めて置きました昔語りであります。此の次より第二年三年と順に記してお目に懸けます。

六工社創業第二年目の春

六工社創業第一年目は前段に記しましたる有様にて、先づ先づ目出度く閉業致しました。私は宅に歸りまして、弟妹の春着の用意も調へ、新しき年を迎へまして心地よく覺えます折から、いと喜ばしき事が家の内にもありました。末の弟が永々病氣の爲め夜分床に就きますと泣きますので、母は永い間夜と共に抱きかかへて立盡して居ますので體が弱ります上に、弟の植疱瘡のこじれが乳に傳染しまして乳首が切込みまして、乳を吞ませますと非常に痛みますのを見るも痛ましいやうでありました。私が休業で歸りました其の夜から手代りをしてたいと思ひましても、私の留守中生れましたから私に馴染みません、私にはだかれませぬ。致し方が無いからお前は先に休めと母が申しますから、私も床に入りますが、其の泣聲を聞き母の立盡しますのを見ますと中々眠られませぬ。毎夜毎夜其の通りに心を苦しめて居りましたが、又私の事でもありますから、神の御力を願ふより外仕方がないと思ひまして、十二月十九日の眞夜中、庭へ

出、泉水の氷を碎き、自身は丸裸になり、金盥にて水を汲み幾杯も幾杯も肩よりかけて身を清め、八幡やはたの八幡はちまん様竹山の稻荷様を一心不亂に祈念致しました。八幡様へは母の乳の治りますやう、四足二足並にいり豆を三ケ年間断ちまして、稻荷様へは弟の夜泣の治りますやう、御願果しには赤飯と油揚げを奉納致すと申して、其の翌夜二十日の夜弟の夜泣がふつと止りました。私は今にも泣くかと思つた。其の夜は目も眠らず氣を付けて居りましたが、實に靜かに休みまして、夜はほのぼの明けました。母は幾月此の方になく弟が休みますので、疲れて居ます事とて日の高く昇りますまで知らずに休みまして、八時頃やうやう目を覺し始めて、夕べは坊がよく休んだので此のやうに遅くなる迄知らずに休んだと申して喜んで居ました。

其の翌晩も能く休みましたが、決して願がけを致した事は申しませぬ。母が神信心を好みませぬので。二十一日に先々代の祥月命日で眞田の姉が参りました。姉は私以上に神信心を致すので。母も十分眠りましたのでいと快き顔つきになりました。何となく氣力も付きましたかのやうに見受けます。私は其の嬉しさは今に忘れませぬ。

それで私は何卒今晚も能く下に休みますやうと心に念じて居りましたが、實に幸ひ其の後は毎夜毎夜下に休みまして、一度も泣きませぬので、弟も日に日に快方に向ひ、母の乳も能く眠られますので元氣が付きます故か日に日に快くなりまして、一月頃は大方治りましたから、日々楽しく嬉しく、時節は寒中ながら家の内は春の如く、朝から晩迄笑ひ續けて居ます。(以上記しました事を今只の皆様が御覽になりまして、迷信も甚だしい、此のやうな事がある筈が無いと仰せられませうが、決して偽の事ではありませぬ、ありの儘を認めましたのであります。實に竹山の稻荷様位夜泣をお止め下さいますのは恐入つたものだと思つて居ります。)

其の内にも六工社の工女方が日々御年始にお出下さいます。中々賑やかな事でありました。母と私で居ります時でも笑ひ續けますので、裏隣の方が、横田では親子で居て何が可笑しくて毎日毎日笑つて居るやらと申されたと申す事でもあります。人様が不思議にお思ひになりますも御尤もであります。母が色々面白く話しましても弟や妹がつまらぬ事を申しても、私が極々の笑好きでありますから皆笑ひますのであります。折節は餘り笑ひますので叱られた事もありませんが、猶をかしくなりまして陰に逃込んで笑ひます事は毎度ありました。父は留守、母と弟妹と私ばかりでありましたから、先づ極樂と申すはあのやうな時の事を申すのでありませう。六工社に居ましては如何に笑好きな私でも中々笑ふ所ではありませぬが、宅に居りますれば其のやうな心配もありませぬ、日々母と弟の快くなります嬉しさに追々母の顔色も赤味を添へて參りますので、只もう嬉しい事ばかりでありますから、毎朝弟共妹共四人學校へ參ります世話や

ら家の事の仕事などの忙しき事も喜び勇んで致して居りました。すると慥か二月初かと覺えます、或日中村氏がお出下さいました。母と共に直にお目に懸りました。

蒸汽機械の元祖六工社製絲の初賣込

——生絲二捆 中村氏賣込場の物語——

扱中村氏へお目に懸りますと、いといと喜ばしきお顔であります。同氏は至つて人相のよい方ではありましたが、又至つて眞面目で居られますのが常がありました。先づ時候の挨拶が済みますと、同氏が「扱昨年中は段々御心配下さいました、六工社の絲を此の頃賣込みまして、實に上々の首尾でありました。それで早速お禮旁々賣込の様子を申し上げようと思つて伺ひました」と申されました。母も私も日々笑の中から心にかけて居りました事でありますから、何と

も申されぬ程其の物語を聞きたいと思ひました。

中村氏物語——「扱私も悪い繭ばかりでとりました真黒な絲只貳梱持つて参りました。其の心配はどの位だかわかりません。仲間の者は皆上等な繭でとつた雪のやうな絲を澤山持つて参ります事でありますから、中には私を馬鹿にする人、又そんな絲を持つて行つて賣れるものかと申さぬばかりに申されるのを聞き、其のつらさは何とも言はれませぬが、仕方がないと諦めて何とも申さずこらへて居りました。いよいよ今日は生絲の検査場へ引込みました時の私の心配はどの位でありましたらう。恥かしいやら情ないやらで後の方に引込んで居りました。仲間の者は是見よがしに銘々自分の絲を出しました。其の美しさは譬へやうがありません。いよいよ私の番になりました、二梱の絲を出しました時は丁度お姫様のおみ足と私の此の毛臍を並べたやうで、實に顔が赤くなりました。すると仲間の者は絲と私の顔を取分けに見て笑つて居るやうに見えます。

穴があつたら入りたいと思ひました。其の黒い絲を西洋人が一目見まして直に『是は珍しい絲を持つて來た。是は蒸汽機械の絲ではないか』と尋ねますから、『左様であります』と申しましたら、『此のやうな絲なら何程も買つてやる。絲は何程あるのか』と申しますから、『此の二梱だけです』と申しますと、『惜しい物だ、なせもつと澤山持つて來ない、是は氣に入つた、澤山あれば七百枚でも八百枚でも買うけれど、たつた二梱では幾ら良くてもはした物で、さうは買ふ事が出來ぬから六百五十枚迄に買つて置く、此の次は澤山持つて來るやうに』と申されました時は、私は夢ではないかと思ひました。それで座繰の雪のやうな絲は『四百五十枚より買はれぬ』と申しましたので、仲間の者も驚いて、『あんな黒い絲を六百五十枚に買つて、何故此の絲を四百五十枚により買はれぬのだ』と申しましたら、『お前さん達もあんな絲を持つて來れば幾らもよい値に買つてやる』と西洋人が馬鹿にしたやうな事を申した時の皆の顔は何とも譬へや

うのない顔をして居ますに引替へ、私の鼻が俄かに高くなりまして此のやうで
 ありました(天狗の鼻の眞似、兩手を鼻の先にやつて手眞似で致されまして)、實に西洋
 人の目の高いには驚きました。又蒸汽機械の絲のよろしいと申す事も初めて承
 知致しました。先づ此の位嬉しかった事は生れて初めてであります。仲間の者
 の萎々して居ますのを見るとをかしくてたまりませんでした。餘り私を馬鹿に
 して居りましたから、『私等はな、色は黒くもそんな絲は持つて來ぬ、品は少く
 も上等の品を持つて來る』と申してやりましたが、誰も一言も申しませんでし
 た。あんな選り出し繭でとつた絲より貳百枚も高く賣れるとは、實に驚いて夢
 のやうに思はれます。其の後私に向つて小さくなつて居つて、實に心持が宜し
 う御座いました」と申されました時は、母も私も生きかへつたやうな心持が致
 しまして、口も結ばれぬ位喜ばしく感じましたが、何を申すも賣込まぬ先は口
 に出す譯に參りませぬ。殊に煮てとらせて呉れと申された時、大里夫人のとら

れた時、私が先に立つて立派な事を申して強情を張りました事でもありますから、
 實に實に嬉しく、中々言葉に盡されませぬ。「それはまあ實に結構で御座いまし
 た。やうやう安心致しました」と申しまして、四方山の話に時を移して歸られ
 ました。

何故開業七月以來十二月迄にやうやう二梱かと申しますと、人の絲を賃挽き
 致したのは皆座繰のやうに小さい四角な大枠にかけて角をしめし、島田に
 して下げ絲にして座繰の中へ入れて其の主が持つて參つたのであります。それ
 故其の主が、友よりはよりがかかつて一筋一筋にばら／＼致しますので、眞綿
 のやうに軟かにならぬと小言を申します。又元方の人達も矢張りどうも軟かに
 ならぬ軟かにならぬと私に毎々小言を申されましたが、私は煮過ぎて腰折れ絲
 になる事を皆様がご存じないからあのやうに申されるのだと心中思つて居りま
 すので、どのやうに申されましても富岡通りにして居つたのであります。仲間

の人々も私同様中々聞きませぬのが實に仕合せになりました。賣込みの物語を聞きましてから、母と兩人明けても暮れても其の事ばかり申出しまして、「まあよかつた、是でやうやう安心した」と母も申します。私も「實に嬉しい事であります、是でやうやう元方の人達も解りましたであります」と申して、又尋ねられます工女方にも話しまして、共に喜んで居りました。

賣込相場銀目の事

先に一寸認めますのを忘れ書残しましたから、一寸左に認め置きます。

只今は如何や、其の頃は生絲の價は皆銀目で申しましたから、

六工社初賣込の六百五拾枚は

現金千八拾參圓參拾錢に相成ります。

座繰の四百五拾枚は

現金 七百五拾圓に相成ります。

御存じかも知れませんが、私の承知致して居ります事、三十九年前の事故一寸申上げて置きます。銀目は六で割りますと現金が出ました。

只今考へましても、上等の繭で製しましたものが七百五拾圓、選り出し繭の縮緬絲に其の頃するやうな下等の繭で製したものが千八拾參圓參拾錢になりましたことでもありますから、人の驚いたのも無理はありません。しかし西洋人が蒸汽製法を奨勵致しましたのかも知れませぬ。

賣込後の六工社

横濱の初賣込みが前文の次第でありましたから、生絲界の人々は申す迄もなく、市中至る所此の評判を知らぬ者は無いやうになりました。其の頃は新聞と申すものは東京には二三種ありましたやうであります。信州などへは先づ參

りませぬが、人から人に傳はりますのも中々恐ろしいものであります。六工社とさへ申せば生絲では並ぶものが無いと人々に思はれるやうになりました。あだかも旭の昇るが如き有様でありました。僅か半年も立たぬ内にかく迄相變ずるものかと、只々驚の外はありませぬ。

其の後私共が通りまして「豚」とも申しません、「末は雲助」の歌も聞きませぬ。私は實に人は正直なものだと感心致しました。私共の喜びはどのやうでありません。しかし兼て期したることなれば、別に威張りも致しません。此の上とも益々勉強して製絲場の隆盛になりますやう、又二つには富岡御製絲場の御名を揚げたいと日夜念じて居りました。

日記の寫し

大正二年十一月廿五日認め

和田 忍 一

卷末記

明治七年七月、漸く準備の整つた六工社（後に本六工社と改稱）は、富岡へ修業に行つてゐた一行の歸るのを俟つて愈々開業しました。

是より先、六年の冬頃から、松代商法社に關係してゐた大里忠一郎の首唱で同志を語らひ、新式の機械製糸場の創立を計畫し、元方九人九百圓を出資して此事業に着手しました。尤も其資金は工場建築半ばでなくなつてしまひましたが、初代の社長春山喜平治が一番の出資頭だつたといひます。

明治七年の春、只今本六工社第一分工場の在る松代町の南郊西條村字六工^{ロッケ}へ建築を始め、夏迄に四間に十五間、五十人繰の繰場が出来上りました。官營とはいひながら富岡製糸場の創立費用は建築其他で十九萬八千五百七十二圓を要したといひますから、それに比べては規

模といひ設備といひ無論比較にはなりません、民間の事業で、しかも封建制度崩壊の後を受けた舊藩士族の人達を中心とした合力事業としては兎に角思ひ切つた企てでありました。いはば産婆役として陰に陽に盡力されたお英さんのお父さん横田數馬の骨折りも一通りではなかつたらうと思はれます。

六工社創業に際し、元方の苦心は申す迄もないが、大里氏等を助けて努力した者に海沼房太郎がありました。本書（一八一―二二頁）にも、その隠れた功績を顯彰する意味で詳しく書かれてありますが、蒸氣に依つて繭を煮ることを話しても人々が中々承服しないので、煮えたりぎつてゐる鐵瓶の口に籐を挿し、湯氣を手洗盥に導いて水を温めて見せたとか、ここで工夫して拵へた蒸氣元釜の繼目へ里芋の殻の干したのを詰めて湯氣による膨脹に依つて蒸氣の漏れを防ぐ工夫をしたなどといふ逸話が残つてゐるやうに、發明の才に富んだ器用な人でありました。

首唱者大里忠一郎は、天保六年八月西條村相澤氏の次男に生れ、松代藩士大里氏に養嗣子し、初は僅か三兩四人扶持徒士席の士分に過ぎなかつたが、家老眞田櫻山に拔擢されて買物方となり、明治元年四月甲府の守備から轉じて飯山城の攻戦に従ひ、七月には河原均の率ゐ

る藩軍の先發隊に加はつて越奥の地に轉戦し（前篇解説十二頁参照）勤王の功に依つて賞典祿二十六石を分與され、給人格に進みました。松代物産會社にも關係し、又明治二年四月に商法社といふ一種の金融機關が設立された時にはその役人の末席に列しました。戊辰の役後藩の財政窮乏し盛に藩札を發行したこと等が導因となつて翌三年十一月の騒動が勃發し、大里氏もその家を焼かれました。その商法社の取締役頭取は蠶種業界の先覺者更級郡羽尾村の大谷幸藏でありました。

六工社創業に當つて、その經營の基礎となり設備の基準となつたものは、嘗て横田氏が富岡から寫し取つて來た（前篇三三―三五頁）ブリュナ條約書、製糸業見込書、及び富岡創業の際政府へ提出したといふ製糸場取扱方法伺書等で、備付け機械の様式や寸法は富岡に倣ひ、ただ材料を變へたり作り方を輕便にしたりして成る可く費用の嵩まないやうに工夫したといふことでもあります。

機械運轉の動力は無論水車を利用したのでありますが、汽罐即ち蒸氣元釜は銅でありました。最初は上田へ註文して鑄物で作らせて見たが思はしくなかつたので、松代の銅壺屋に銅で張らせ、上部は蒲鋒形で脊中に蒸氣を通はせる穴を設け、も一つの吹出し穴は風呂桶のホ

ゾの様にボロを捲いた木の栓で塞ぎ、下方は土で築いた竈でありました。故に九日に一度位づつは元釜の掃除と塗替へを要したのであります。(三一頁)後に伊太利人が視察に来て、銅の汽罐を危ながつて近づかなかつたが、その無造作な木の栓を抜いて見せたら漸く安心して釜場に入り、素人にしてはよく拵へたものだと言つたさうです。後年勸業局巡視官速見堅曹が六工社を參觀し、銅の汽罐をよく視て、その不備なところを指摘して懇ろに教ゆるところがあつたので改良を加へ、明治十四年に鐵の汽罐にしたといふことであります。

導管(パイプ)や煮鍋で苦辛したことは本書(一九頁)にもありますが、パイプは見本に銅で作つてみたこともあり、或は煮鍋の中へ導入して中を廻して蒸氣を吹かせるやうにしたり、或は煮鍋の横に通したり、或は蒸氣の吹出し口へ糸が絡むのを避けるため上へ蓋のやうな仕掛をしたこと等もあつたといひます。繰鍋は富岡では佛蘭西から直輸入の眞鍮製でありましたが、ここでは素焼で作りました。之は冬季の凍にも強いといふので、後には北信其他各地へ澤山賣出したさうです。又鍋が圓形なため藪が向うの方へ行つて不便なので中程へ仕切りを拵へて見たこと等もあり、段々工夫して明治十一年頃には半月形とし、パイプの吹出しも初は中へ取付けたが不便なので、外へ瘤の様にして中から穴を明けたと申します。後年視察

に來た者が、これは自分が發明して新案特許を得たもので、やたらに拵へられては迷惑すると苦情を云つたこともあるが、苦しみ困しみ抜いた揚句に漸く考案したものだといひます。

前篇にもあつたやうに、海沼房太郎等三四人が工男としてしかも短期間富岡製糸場の實際を見學して來ただけで、兎に角これだけの機械繰糸場を創設したのですから、えらいことでありました。それにかういふ事業の性質として之が經營に當つては、原料藪の仕入れから製品の賣捌、相場の變動、資金の融通等幾多の困難が附纏ふ上に、元方は所謂士族の商法で新しい經驗で事毎に不馴れでありました。機械其他の設備は工女が不平をこぼす程不完全でありました。この不足を償つて完全以上に活かして行つたのは人の力でありました。お英さんを先達とした、富岡仕込の娘さん達の眞剣な心構と熱心な勤務とが六工社の前途に光明を齎しました。富岡で積んだ一年有半の修業が、根強い底力となつて六工社經營の基礎を固めたのであります。元方の人達も之に鑑みるところあつてか、工女の選み方から工女取締の人選に苦心を拂つたとあります。お英さんは元方と工女の間立つて、涙ぐましい奮闘を續けたのであります。雙方の無理解から起きるいきさつも獻身的な至誠が解決したのであります。

六工社が着々經營の緒について行くに従ひ、他の士族中にも御下賜の祿券を資本として同

盟に加はるもの二十餘人に達し、生繭購入の途を講じて賃繰の法を廢する等業務の體面を一
新するに至りました。是より先大里忠一郎は春山喜平治の後を嗣いで社長となり、明治十二
年には士族授産の爲めの低利資金一萬五千圓を政府より借入れ、工場其他の構造設備を改め、
釜數も百人繰に増しました。現在本六工社第一分工場と稱してゐる建物はこの年の改築であ
ります。明治十五年には更に百三十一人繰りの工場を松代町に新築し、兩工場併せて工男女
四百數十人に及び、規模やうやく整つたのであります。

大里氏は、社務を執掌する傍ら、明治十一年に設立された縣立製糸場に長野縣御用係とし
て之を監督した外、明治八年に設立された須坂の東行社を初め、縣下十數ヶ所に建設された
機械製糸場は、その勧誘と指導に依つたものが多かつたといひます。明治十二年國立六十三
銀行の支配人又頭取となり、翌十三年には西條村の戸長として村治に盡し、海外貿易の利便
を計るため正金銀行設立の企のあつたときには進んで之が發起人となり、翌十四年同志と横
濱同仲會社を設立して生糸の海外直輸出の途を開き、明治二十二年三月、農商務省の依頼に
より埼玉縣人木村九藏、群馬縣人田中甚平と共に海外に赴き、伊佛兩國を視察し、單身米國
に渡つて機械業を視察して十月に歸朝しました。明治二十四年には藍綬褒章を賜はり、明治

三十一年六月、六十四歳で歿くなりました。

六工社は其後明治四十二三年頃、或事情のため悲境に陥つたこともありましたが、西條村
に創設されたものは残つて本六工社と稱し、現在では工場が三つに分れ、ここを第一分工場
として、主として同社の工女養成をしてゐます。

口繪第二頁の上は、明治十一年 明治大帝御巡幸長野御駐輦の節、臺覽に供し奉つたとい
ふ工場内の様子を描いた繪圖の一部で、下圖は現在本六工社第一分工場の全景であります。

二

六工社創業當時、小野組といふのが上田町にあつて只今の銀行のやうな仕組で、六工社も
この「お店たなから資金の融通を受けてゐたやうだ（八三頁）とありますが、この小野組は主人を
小野善助といひ明治二十一年に歿くなつた京都の人で、初は生糸の取引と爲替業を営み、家
號を井筒屋といひましたから諏訪地方等では「井善」と呼んでゐました。維新の際三井島田
と共に爲替方となりましたが、内實は資金の流用を默許されてゐた爲め生糸取引には好都合
な立場にあつて、之を營業の主たる眼目とし、新式機械による製絲業普及を従として、諸方

の工場經營に放棄して居りました。當時信州では上田と松本に支店を置きました。

然るに明治七年十月頃に至り、政府は爲替方に對する方針を變へ、取扱つてゐる現金を回収し、又擔保を要求して取締つた爲に、三井だけ残つて小野組は破産してしまひました。本書に、お店も段々むつかしくなつて潰れるかも知れぬ(八三頁)といひ、此度お店が閉店になり、その方への遠慮も致さねばならず(八五頁)とあるのは、その間の消息を語つてゐるのであります。

これが爲め六工社も随分困つたやうでありましたが、偶々松代へ生絲の買出しに來た上州前橋の生絲商勝山某が、この窮狀を見て大いに同情し、原料繭を供給して賃繰に依る方法を盟約したので、一時の急を凌いだといひます。二三年の後勝山は生繭の仕送を解約して來たが、その頃は六工社の基礎が安定してゐた爲めに痛痒は感じなかつたといひます。

小野組の瓦壤は諏訪地方の製絲業者には大打撃でありました。諏訪地方の製絲業は抑ゝの初から小野組との關係が濃かつたからであります。

三

松代の六工社は富岡の官營製絲場に倣つたもので所謂佛蘭西式でありましたが、之と前後して本縣へは所謂伊太利式の機械繰絲業が入つて來てゐます。後者の代表的なものは諏訪地方の製絲業であつて、小野組が經營してゐた東京築地の製絲場を範に取つた上諏訪の深山田社等がそれでありました。

抑々本邦に於ける機械製絲の濫觴は、明治三年六月、上州前橋藩が藩士速見堅曹をして内外に於ける製絲法を調査せしめた結果、瑞西人ミューラーを招聘して伊太利式に依る洋式機械製絲場を前橋町に開いたのが機械繰絲工場の嚆矢で、次第に釜數を増加し、速見堅曹之を主裁監督しました。この前橋製絲場は明治五年に群馬縣の管轄となり、後小野組に引渡されました。

明治三年十一月、小野組の商古河市兵衛が、前橋製絲場に倣つてミューラーを顧問として東京築地に製絲場を設立し、明治四年一月には、勸業寮に於て東京赤坂鍋島邸内に百人繰の製絲場を設立し、ミューラーが之を監督しました。

斯の如き大勢が遂に廟議を動かし、大藏民部兩省が斯業の改良を圖る爲めに明治三年から計畫して、佛蘭西人ブリューナを顧問として明治五年に官營の一大製絲工場を富岡に創立す

るに至つたのであります。

松代から富岡へ修業に行つたやうに、明治五年三月、上諏訪からは二十五人の工女を築地へ傳習に派遣しました。その一行の中、藤森けん（安政二年生）小松かね（嘉永五年生）の兩刀自は今尙健在ださうです。その時、工場の設備方面の見學を兼ねて藤森儀右衛門が同行しました。

かくて傳習工女を派遣した上諏訪の深山田社は、その年六月から工事に着手し、八月下旬には繰糸を始めました。派遣工女の中、六人は六月に歸省し、他の者は九月に歸りました。故に長くて半ヶ年實に短期間の傳習でありました。松代の一行が一ヶ年半を富岡に止つて修業したのに比べると興味ある對照でありました。尤も、富岡は官營で非常に嚴格であつたに反し、築地は民間の經營でそれに工場は自由解放主義で傳習せしめたといひますから、計畫的に臨んだものには短期間の傳習で済んだのだらうと思ひます。それは兎も角、かゝる工女派遣のやり方やその創業經營の上などにも、松代と諏訪との特徴が各々よく表はれてゐるやうに思はれます。

深山田社は創業當時は二・三十人繰でありましたが、翌六年から百人繰にしたといひます。

この六年には高井郡雁田村（今の上高井郡都住村の字）の關菊之助も、小野組に倣つて座繰を機械繰糸に改め、九十六人繰の工場を設立しました。明治六年から七年へかけて、本縣下では、松本在出川の二十人繰、安曇郡大町の十八人繰、佐久郡小諸の三十二人繰、伊那郡宮田の宮泉社、高井郡中野、松本等に機械製繰糸場が設立されたといひます。

一體、佛蘭西式といふのは、煮鍋繰鍋共に圓形で、工女一人で煮繭と繰糸を兼ね、蒸氣を通じて繭を煮る爲めに汽罐が必要でありました。伊太利式といふのは、煮鍋は圓形、繰鍋は半月形、共に金屬製で、煮鍋一個繰鍋二個を一組として之を臺上に鼎狀に配置し、従つて工女は三人を一組とし、一人は煮鍋を受持つて銘々に薪を焚いて煮ることと索緒とを行ひ、他の二人は繰鍋を擔當して専ら繰糸するのが特徴でありました。

四

小野組の築地製繰糸場は明治六年六月に閉鎖になり、この系統を引いた上諏訪の深山田社も小野組瓦壞の餘波を受けて、翌七年十一月に閉業しました。次いでその翌明治八年に、岡谷に武居代次郎を盟主とし九人の合資組織に依る中山社が創立されました。

中山社は伊太利式と佛蘭西式とを折衷したものでありました。明治十三年に中山社から出した『共進會生絲出品申告書』に、

「専ら器械設立ニ注意シ、首トシテ富岡製絲場ヲ一覽シ、其他各地ノ器械ヲ熟察シ、其輕便ナルモノヲ折衷シ、運轉ハ水車ヲ用ユルト雖モ、汽機ニ至ツテハ、中根氏(小野組 上田支店長)說ク所ノ松代西條製絲場ニ於テ富岡ノ蒸汽機ヲ模シ簡易ナル汽機ヲ使用スルノ事ヲ尙同氏ニ詳質シ、其規模ニ倣ヒ之ヲ裝置セリ」。

とあり、六工社創立當時からの關係者増澤壬子吉氏の談に「諏訪邊りからもよく視に來たが、此所の設備を見て、算盤をとつてやる仕事だからこんな大名仕事は出來ぬと云つて別の式をとつたと聞いてゐる」とあるのは、所謂諏訪へ入つた伊太利式の事であり、中山社創立當時からの關係者武井文炳氏も「松代の裝置を取入れた」と云はれたさうであるから、初めて諏訪へ入つた伊太利式と富岡系統の佛蘭西式を參考して、いはば諏訪式とも云ふべき様式に依つたのが、岡谷製絲業の濫觴でありました。

六工社へ視察や傳習に來た者には諏訪地方や越中方面が多かつたさうであります。伊勢との交渉は無かつたといふことであります。然るに尋常小學修身書卷五にもあるやうに、伊

勢室山の伊藤小左衛門が明治の初年機械製絲を創業するに際しては、信州製絲業者と密接な交渉があつた筈であります。今回圖らず平野村誌の編纂に携つた岡谷の小口珍彦氏の研究に依つてこれを明かにすることが出來ました。

伊藤小左衛門は横濱開港當時外國に需要多きを看取し、製茶並に製絲の業を創め、殊に製絲に就ては、初は手繰を始めたが、機械繰絲に依つて精良品を作らうと志し、明治五六年の交、縣廳の命に依り人を遣して、富岡製絲場及び上州信州地方の斯業を視察せしめ、官に乞うて富岡製絲場に於ける機械の圖を得、その圖に依つて其の機械を模造し、教師の派遣を富岡製絲場に乞うたが許されませんでした。そこで明治六年に甥小十郎を信州に遣はしました。一日の長を持つてゐた信州から教師を招聘しようとしたのであります。然るに小十郎は當地の老練家の言に依り、座繰教師數名の雇傭を約して歸國しましたが、いたく小左衛門に叱責され、旅装も解かず直ちに信州に折返して、前契約を解き、新機械繰絲に依る絲教師を探し、數ヶ月して二名の招聘を約することが出來ました。中山社の創立者武居代次郎の日記、明治七年四月十八日の條に、

「晝後伊勢三重縣管下室山村伊藤小十郎殿絲器械之事ニ付一宿之事」

とあるさうであります。初め伊藤小左衛門は機械製絲場の設立を企圖しましたが、身自らは已に老境に入つてゐたので、甥小十郎をして主としてその創設の任に當らせ、小左衛門歿後も製絲業はその擔任するところで、後年室山製絲の名聲を博し得たのも小十郎畢生の努力の功であるといはれて居ります。小十郎は明治三十六年五十一歳で歿くなりましたから、この絲教師招聘に來た年は二十一歳の青年でありました。この頃から小十郎は信州上州に往復して、明治十四五年頃迄に三十數回に及んだといひます。當時武居代次郎は父祖以來手引及び座繰製絲を營み、明治六年には深山田製絲場に倣つて自宅に十八人繰の器械製絲を始めてゐたといひますから、叔父の小左衛門の命を受けて來た小十郎が國元に開かうとする製絲場には極めて手頃の好模範であり、殊に其實験談は有力な參考になつたらうといはれて居ります。この時招聘されて行つた絲教師は平野村今井の今井治之助と上諏訪小和田の小松うめの兩人でありました。今井治之助は嘉永二年生れで、この明治七年には二十六歳でありました。その兄要四郎も明治六年から器械製絲を始めて居り、治之助は主として原料繭の仕入れを擔當し、若い頃から暇さへあれば各地の製絲場を見學し、殊に絲結び（ねぢり造り）の名人で各工場を廻つて歩き、この邊で共進會等へ出品する場合には、治之さのねぢつたのでなければ

ならぬとされた位であつたといひます。小松うめは嘉永六年生れであるから治之助より五歳の年少で、伊勢行のときは二十一歳でありました。去る明治五年に上諏訪から築地製絲工場へ傳習に行つた二十五人中の一人で、技術も優秀の一等工女でありました。この人は明治二十七年に四十三歳で歿くなりました。

治之助が明治七年四月に伊勢へ赴き、五月下旬に一旦歸國し、同月末にうめを伴つて再び伊勢へ行きました。兩人共十月頃迄伊勢に居つたのではなからうかといはれて居ります。

伊勢では諏訪から兩人を招聘して十人繰を設置してやつて見ましたが、未だ其成績は思はずしくないので、小左衛門自ら富岡製絲場に赴いて參觀し、又姪と小十郎の妻とを富岡へ遣つて傳習せしめ、更に蒸氣機關を設け、機械を三十二臺に増加して千四百斤を得、外商に示してやうやく好評を博するやうになつたと申します。伊藤氏は代々小左衛門を襲名し、この時の小左衛門は五世で、明治十二年に六十二歳で歿しました。

伊勢と諏訪との關係ではかういふ話もありました。現在岡谷山共製絲の重役林市十郎氏の談だといふのを小口君から又聞きしたのでありますが、伊藤氏が今井治之助を招聘したとき主として周旋の勞を取つたのは岡谷の尾澤金左衛門であつた、その緣故により明治十八年の

春、平野村開明社の三社長（片倉兼太郎、林國藏及び尾澤金左衛門）が伊勢參宮の歸途、當時精良絲生産を以て聞えてゐた伊藤氏の室山製絲場を訪れました。然るにその附近に桑園が極めて乏しいので不審し、伊藤氏に質したところが、原料繭は美濃笠松附近及び武州深谷邊から購入し、武州から仕入れた繭は蒸殺の上、東京を経て船送して來ると聞き、歸來、その夏繭から倉賀野に人を派して仕入れました。行つて見ると西條の六工社と富岡製絲場では已に買出しに行つてゐたといふことであります。これが諏訪製絲の原料繭仕入れに關東地方へ進出した初だといひます。

三社長が伊藤家を辭して來るとき、土産だといつて自家醸造の醤油を一升づつ贈られ、有難くもあり道中荷厄介でもあつて困つたといふ話であります。尋常五年の修身書にも小左衛門が兄弟力を協せて家業の醸造業を挽回した話がありますが、こんなところにも伊藤氏の家風が奥床しく偲べれます。

以上は六工社創業に關し、信州製絲業勃興當時の状況の展望を試みようとした爲めに解説の筆は些か冗長に亘つたかも知れませんが、松代と諏訪との關係を辿つて伊勢室山の伊藤氏の製絲業との交渉迄參りました。一體本會のこの學習文庫は教科の補充といふことを主眼と

し、併せて郷土に關するもの及び一般文化に關するものを選択して編纂してゐるものであります。この富岡日記と富岡後記を読まれた讀者には本文庫の使命とするところをはつきり了解されたことと存じますが、副産物として修身書に書かれた伊藤小左衛門の事蹟を明かにし、それと我が信州との交渉を際かにすることに依つて修身書を眞に活用し得る資料を得ることの出來たのも不思議な機縁でありました。

五

西條村の増澤壬子吉翁は本年八十歳、本六工社の創業當時から關係して居た元方の一人であります。翁は當時を回想して、「お英さんは偉い人でありました。ただ業を教へるばかりでなく工女の躰をよくしてくれました。只今も此處の第一工場は工女の養成所で、ここで養成した工女を他の工場へ分けて居りますが、教婦の娘達に、仕事を教へるばかりが能でも無いから、學校の先生方が生徒を教へるやうに御行儀も躰けてやつてくれといふことであります」と述懐して居られました。女史は嚴格でありましたが工女はよくなづいたさうであります。一方工女達の不平をたしなめると共に一方元方の經營に對して反省を促しつつ事業進

展の楔となつて盡瘁したのであります。

明治八年有志數名の協力に依つて須坂の東行社が設立されました。富岡其他の機械を折衷して工場を數ヶ所に設置しました。女史は此處の教師として招聘され、大里氏等と共に赴いて指導の任に當りました。東行社は矢張り機械運轉は水車でありましたが、湯を沸すのは焚火でありました。最初は八十人繰で翌九年には同盟者四十有餘名工人六百名ありました。此處で明治十一年に共同揚返所を設けたのが信州に於ける嚆矢であらうといはれて居ります。

明治十一年 明治天皇御巡幸に際し、長野縣廳は縣立長野製絲場を只今信濃教育會館の在る所からあの西へかけた位置に設立し、縣下から優秀な工女を選抜しました。女史も選ばれてこの教師になり、九月九日、親しく繰絲を 天覽に供し奉る光榮に浴しました。

金拾五錢

横田 ゑい

御巡幸之節業前供

天覽候ニ付頭書之通酒饌料下賜候事

明治十一年九月

長野縣

翌十二年二月十三日には、工女部屋取締兼務を申付けられてゐます。そしてその翌十三年八

月に縣立製絲場教師を辭任して居ります。

横田 英

依願製絲場教師差免候事

明治十三年八月

長野縣勸業課

又、

製絲場

教師 横田 英

製絲場創業以來能ク其職務ニ勉勵シ薰陶教育宜ヲ得各工女ヲシテ技術

進歩ノ效ヲ奏セシムル段殊勝ノ至リニ候依テ金貳拾圓賞與候事

明治十三年八月

長野縣勸業課

このときの辭任は兼て婚約のあつた和田家へ興入する爲めではなかつたらうかと思はれます。本書巻頭の口繪にある著者肖像は、富岡から歸つて十年位後のものであらうかと云つて、女史の令姉眞田壽子刀自が見せて下さつたものであります。

著者和田英子女史は前篇にもあつたやうに、横田數馬の次女として安政四年に生れ、前大

審院長横田秀雄氏及び元鐵道大臣小松謙次郎氏等の令姉であります。後和田氏に嫁し、一昨昭和四年九月二十六日に七十三歳で歿くられました。

本會が學習文庫を編纂するに當り、稿本所藏者大里孝氏の快諾を得てこれを第二・三篇に收め恰も著者の三周忌に公刊し得た奇しき因縁を喜ぶと共に、本書編纂に際し種々教示と斡旋の勞を賜はつた、眞田壽子氏、増澤壬子吉氏、並びに埴科郡松代小學校及び西條小學校職員諸氏の御好意を深謝し、尙解説の參考資料として、本縣勸業課の調査、早川直瀬氏の調査、百科辭典、松代町史、平野村誌史料等に負う所が尠くありませんでした。併せて謝意を表する次第であります。

(昭和六年九月 小池直太郎誌)

昭和六年十一月五日印刷
昭和六年十一月七日再印刷

富岡後記
定價二十二錢



著 者 和 田 英 子
編 纂 者 信 濃 教 育 會
發 行 者 橋 本 福 松
印 刷 者 白 井 赫 太 郎
東京市神田區駿河臺西紅梅町拾壹番地
東京市神田區錦町三丁目拾七番地

精興社印行

發行所

東京市神田區駿河臺西紅梅町拾壹番地

古今書院
振替東京三五三四〇番



群馬県立図書館



0499378-8

小野寺文庫